

大和川今池遺跡

—今池処理場水処理施設等新增設工事に伴う発掘調査報告—

2005年3月

大阪府教育委員会



大和川今池遺跡

—今池処理場水処理施設等新增設工事に伴う発掘調査報告—

2005年3月

大阪府教育委員会

はじめに

大和川今池遺跡は、松原市天美西、堺市常磐町、大和川を隔てた大阪市住吉区庭井に跨って所在する遺跡です。この遺跡は昭和52年に今池下水処理場の建設計画に伴う試掘調査で確認されました。その後、下水処理場や府営住宅建替え、大和川高水敷整備事業などに伴い実施された発掘調査により、旧石器時代から連続と続く遺跡であることが明らかとなりました。なかでも、奈良時代の「難波宮」朱雀門から南に延びる難波大道跡が本遺跡の調査で初めて検出されたのは記憶に新しいところです。

今回報告しますのは、今池処理場の施設拡充に伴い平成13年度から15年度までの2ヵ年にわたって実施した発掘調査結果です。調査では古墳時代から平安時代の建物跡や井戸、溝など多数の遺構を検出しました。また、今池の堤体を調査し、中世の土木技術の一端を窺い知ることができます。

このような成果を収めることができましたのも、大阪府土木部下水道課、松原市教育委員会、及び地元の住民をはじめとする関係各位のご協力によるものであります。本書の上梓にあたりお礼申し上げますとともに、今後とも文化財保護行政へのご理解とご協力を願い申し上げます。

平成17年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 向井正博

例　　言

1. 本書は大阪府教育委員会文化財保護課が、大阪府土木部の依頼を受けて実施した、大和川南部流域下水道事業今池処理場の水処理施設増設工事・雨水ポンプ場増築工事・砂ろ過連絡管渠建設工事に伴う大阪府松原市天美西6、7丁目所在、大和川今池遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地における発掘調査は、文化財保護課調査第二グループ技師阿部幸一を担当者として平成13年6月22日から平成15年3月31日まで実施した。遺物整理は平成15、16年度に、阿部と調査管理グループ技師山田隆一、同林日佐子、同小浜成、同藤田道子が担当して実施した。
3. 本書に掲載した遺物の写真撮影は阿南写真工房に委託した。遺構写真は阿部が撮影した。
4. 調査の写真測量は（株）航空撮影センターに委託した。
5. 出土した銅鏡の保存処理は、（財）元興寺文化財研究所に委託した。
6. 本書の執筆・編集は阿部が行った。第3章第4節付論1は西川寿勝が執筆した。
7. 出土遺物及び記録資料は大阪府教育委員会で保管している。
8. 報告書作成にあたっては松原市教育委員会、堺市教育委員会、（財）大阪府文化財センターの各機関から助言と協力を得ました。記して感謝します。
9. 今池処理場施設増設に伴う発掘調査、遺物整理及び本書作成に要した経費は全額を大阪府土木部が負担した。なお、本書1冊あたりの製作費は1,670円である。

目 次

はじめに

例 言

第1章	調査に至る経過	1
第2章	立地と環境	3
第3章	調査の方法と調査結果	7
第1節	調査の方法	7
1.	位置表示と地区割りについて	7
第2節	調査結果	8
1.	水処理施設南調査区	8
2.	南その2調査区	14
3.	雨水ポンプ場調査区	17
4.	水処理施設北調査区	19
5.	砂ろ過連結管渠調査区	61
第3節	まとめ	63
付論		
	北調査区包含層出土瑞花鳳凰八段鏡について (西川寿勝)	64
報告書抄録・地区割図		70

挿 図 目 次

第1図	今回調査の遺構概略図と今池処理場内の調査地点	2
第2図	大和川今池遺跡周辺の土地条件図	3
第3図	これまでの調査地点	5
第4図	大和川今池遺跡周辺の遺跡	6
第5図	水処理施設南調査区遺構平面図	9・10 (折込)
第6図	水処理施設南調査区出土遺物実測図	11
第7図	003-S E (上)・004-S K (下) 平断面図	12
第8図	005-S E (左)・006-S E 平断面図 (右)	13
第9図	007-S D (右) 平面図・031-S K (左) 平断面図	14
第10図	南その2調査区平面図、037-S D、038-S P 断面図	15
第11図	雨水ポンプ場調査区平断面図	18
第12図	北調査区建物跡位置図	20
第13図	水処理施設北調査区断面図	21・22 (折込)
第14図	建物1(上)・建物2(下) 平断面図	23
第15図	建物3(左上)・建物4(左下)・建物5(右下)・建物6(右上) 平断面図	24
第16図	建物7 平断面図	25
第17図	建物8(上)・建物9(下) 平断面図	26
第18図	建物10 平断面図	27
第19図	建物群柱穴土層断面図	28
第20図	051・052-S K 出土土器実測図	30
第21図	054-S K 出土土器実測図	31
第22図	053-S K 出土土器実測図	32
第23図	055-S E (左)・150-S E (右) 平断面図	33
第24図	207-S K (左)・219-S K (右) 平断面図	34
第25図	221-S K (左)・230・231-S K (右) 平断面図	35
第26図	248-S E 平断面図	36
第27図	446-S K 平面図	36
第28図	446-S K 出土土器実測図	37
第29図	490-S K 平断面図	37
第30図	575-S K 平断面図	38
第31図	625-S K 平断面図	38
第32図	630-S E 上層 土器出土状態実測図	39

第33図	630 - S E 平断面図・井戸側実測図	40
第34図	630 - S E 出土土器側実測図	41
第35図	635 - S E K 平断面図	42
第36図	698 - S K 平断面図	42
第37図	705 - S P (左)・725 - S E (右) 平断面図	43
第38図	743 - S E 平断面図	43
第39図	743 - S E 出土土器実測図	44
第40図	745 - S E 平断面図	45
第41図	745 - S E 出土土器実測図 - 1	46
第42図	745 - S E 出土土器実測図 - 2	47
第43図	746 - S E (左)・810 - S E (右) 平断面図	48
第44図	188 - S D・480 - S D・664 - S D 平断面図	49
第45図	188 - S D 出土土器実測図 - 1	50
第46図	188 - S D 出土土器実測図 - 2	51
第47図	188 - S D 出土土器実測図 - 3	52
第48図	735 - S D 平断面図	53
第49図	各造構出土土器実測図 - 1	55
第50図	各造構出土土器実測図 - 2	56
第51図	包含層出土土器実測図 - 1	59
第52図	包含層出土土器実測図 - 2	60
第53図	砂疊道連絡管渠調査区平面図、ピット断面図	62
第54図	出土珊瑚花鳥鳥頭鏡拓本(右)・復原図(左)	65

表 目 次

表1	人和川今池遺跡の刊行図書	5
表2	府内出土十八稜鏡	66
表3	北調査区遺構・地区対照表	68・69

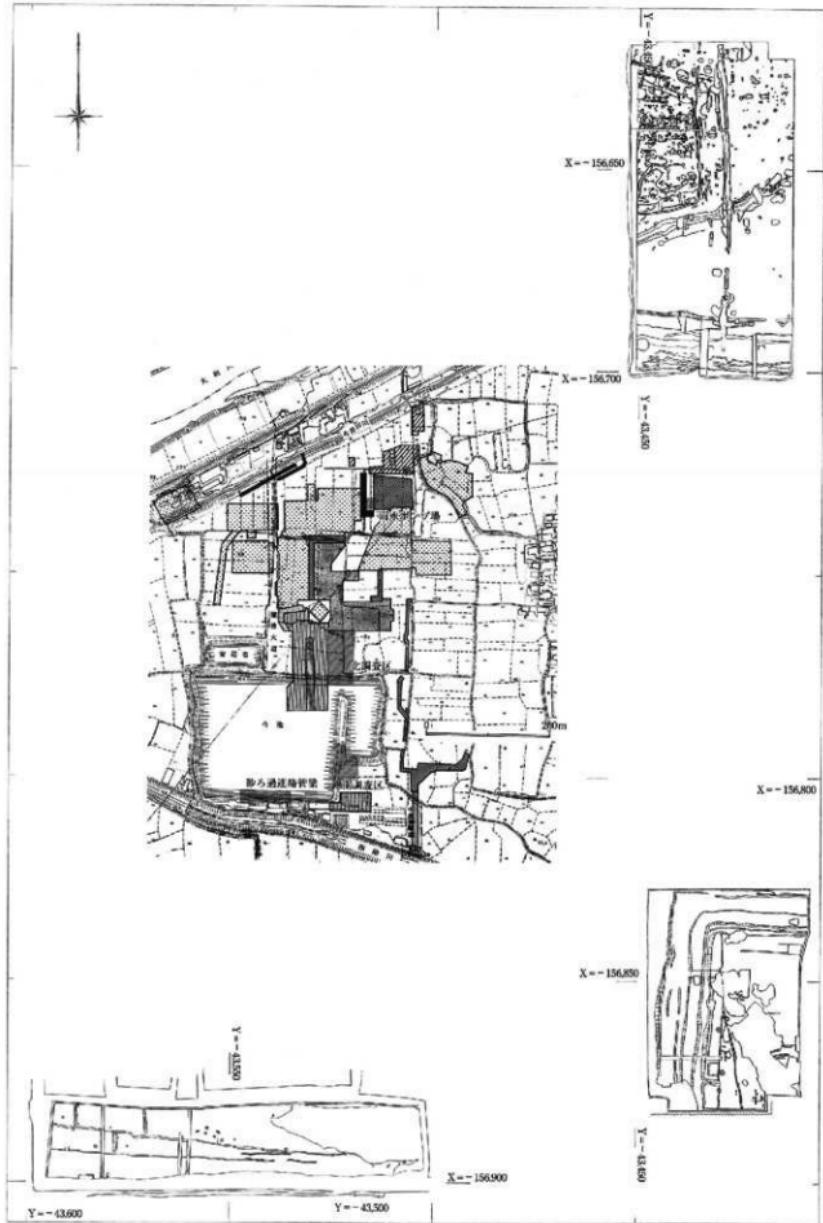
図 版 目 次

図版1	水処理施設南調査区航空写真	
図版2	水処理施設北調査区航空写真	
図版3	水処理施設南調査区全景 (上) 北から (下) 西から	
図版4	水処理施設南調査区企景 (上) 東から (下) 西南から	
図版5	南その2調査区 (上) 全景 (下) 037 - S D	
図版6	雨水ポンプ場調査区全景 (上) 南から (下) 北から	
図版7	水処理施設北調査区微高地部 (上) 北から (下) 南から	
図版8	水処理施設北調査区 (上) 北部東から (下) 東南から	
図版9	水処理施設北調査区 (上) 全景南から (下) 微高地部西から	
図版10	水処理施設北調査区 (上) 挖立柱建物1, 2, 10 (下) 446 - S K	
図版11	水処理施設北調査区 (上) 北堤体下層 (下) 南調査区002 - S D	
図版12	水処理施設北調査区 745 - S E (上) 上層 (下) 井戸側 曲物出土時	
図版13	水処理施設北調査区 各造構 248, 230・231, 725, 746, 547 (掘立柱建物1)、 575, 188, 207	
図版14	水処理施設北調査区 各造構 630, 635, 274	
図版15	水処理施設北調査区 各造構 743, 630, 705, 635, 150	
図版16	砂疊道連絡管渠調査区全景 (上) 今池南堤体検出時 (下) 断面	
図版17	砂疊道連絡管渠調査区全景 (上) 東から (下) 西から	
図版18	出土遺物	
図版19	出土遺物	
図版20	出土遺物	
図版21	出土遺物	

第1章 調査に至る経過

大和川今池遺跡は、1977年（昭和52）に堺市、松原市、美原町など5市町の下水を処理するための「大和川西部流域下水道事業今池処理場」建設計画に伴って実施された埋蔵文化財の試掘調査で確認された。1978年には、大阪府教育委員会や堺市教育委員会、松原市教育委員会が「大和川今池遺跡調査会」を発足させて各施設建設予定地の発掘調査を実施した。その後も処理場内の施設建設計画に伴い土木部と教育委員会が協議を行い、30数次に及ぶ発掘調査を実施してきた。また、処理場周辺では、1980年代に府営住宅建て替えに伴う調査や90年代からは建設省（国土交通省）近畿建設局が計画した大和川高水敷整備（通称スーパー堤防）に伴う大和川河川敷部分の発掘調査が1996年度（平成8年）から処理場北側を中心に下流域から順次調査が実施されている。

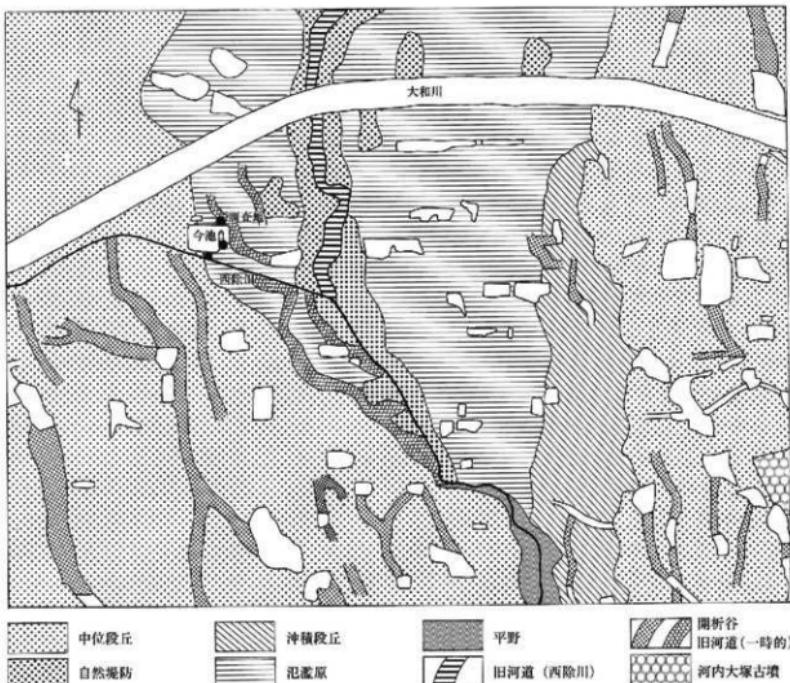
平成12年、関係市町の下水整備に伴い、新たに第3水処理施設の建設を計画した大阪府土木部は、大阪府教育委員会文化財保護課に埋蔵文化財の取り扱いについて協議を申し入れてきた。文化財保護課では、これまでの調査結果から、旧今池の池底部分以外は、発掘調査が必要であることから具体的な発掘調査についての協議を行った。その結果、水処理施設以外にも、雨水ポンプ場の拡張計画、水処理施設と砂濾過施設を繋ぐ連絡管渠建設計画も提示されたことから、水処理施設の発掘調査終了後、雨水ポンプ場、砂濾過連絡管建設予定地の発掘調査を実施することとした。



第1図 今回調査の構造概略図と今池処理場内の調査地点

第2章 立地と環境

大和川今池遺跡は松原市天美西町、天美我堂町、北新町、堺市堺常磐町3丁、大和川北岸の大阪市住吉区庭井、東住吉区公園南矢田にかけて所在しており、東西約1.5km、南北約1kmの広い面積を周知の遺跡範囲としている。遺跡の地形環境については日下雅義氏や服部昌明氏などの分析がある（第2図）。これらによると、大阪府南部は金剛、葛城山地を脊梁として西北側に羽曳野丘陵や、泉北丘陵を形成している。泉北丘陵はさらに高度を下げ、泉州台地と呼ばれる、北に緩やかに傾斜し、大阪平野の沖積地帯に繋がる標高10m前後の低平な台地を造りだしている。大和川今池遺跡はこの台地上から、台地を開析して北流する旧西除川水系によって形成された氾濫原にかけて立地している。今池はこの台地の縁辺部に築かれており、現在は西除川によって断ち切られているが、築造当時は今池の南側を北流する光童寺川か西除川の支流の水を溜めていたと思われる。



第2図 大和川今池遺跡周辺の土地条件図

歴史的環境について、大阪府の分布図によって周辺の遺跡を概観する。大和川北岸の2は日本書紀崇神天皇記にも記載のある依網池跡で、堺市市域の大和川今池遺跡の西半分はこの池に含まれる。天美の東側、松原市三宅は依網屯倉に関係した地名と推察されており、東西2.5km近い範囲が屯倉として経営されていたことになる。池は18世紀初頭に大和川が付け替えられたときに埋め立てられ、耕地化された。また、泉州北台地の東端を北流していた西除川も大和川の付け替えに伴って、旧高木村で流路を西北に振り、今池の南側を通って浅香で大和川と合流することとなつたため、依網池内に流路が設定されている。西除川の南側は北花田遺跡で、弥生時代から平安時代の集落遺構が検出されている。6は東浅香山遺跡で、弥生時代から古墳時代、中世の集落跡である。8は狐塚の小字名が残っている狐塚古墳で、周濠の一部が確認されている。

遺跡西部を南北に貫く遺跡（3・4）は難波大道で、難波宮の朱雀大路から南に延びる官道である。孝徳期の前期難波の宮時代に設置されたと考えられ、摂津と河内の国境の役目を果たしていた。北西の山之内遺跡では弥生時代と古墳時代中期から奈良時代まで続く集落跡が検出され、西に接する速里小野遺跡と一帯の漁業を生業とする集落と推測されている。

平安時代以降は集落の縮小化が指摘されている。

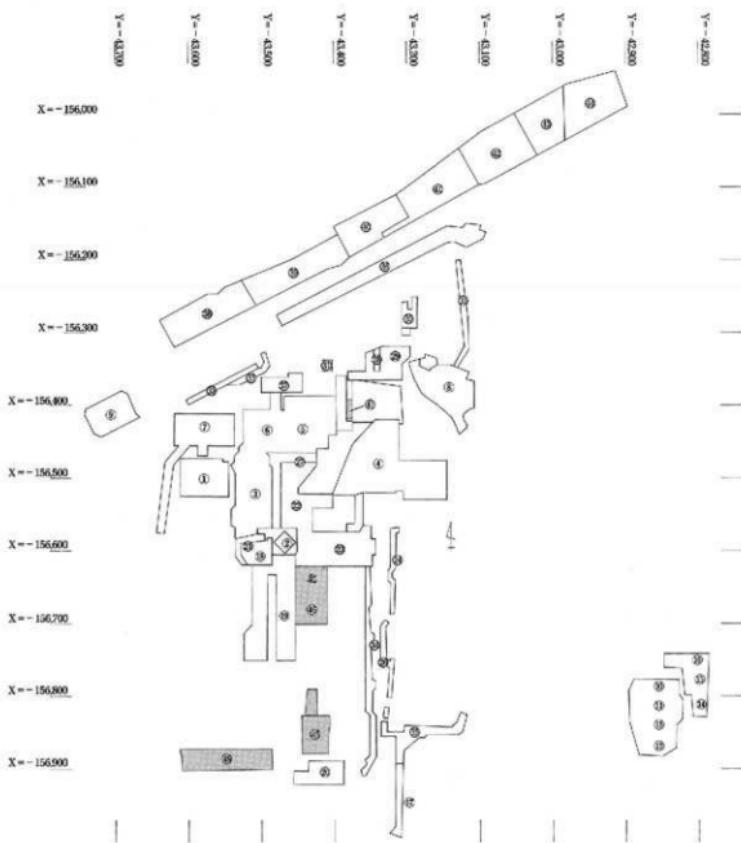
参考文献

「山之内遺跡発掘調査報告書」II 1999. 10 - 市営住宅建設に伴う発掘調査報告書その2 -

(財) 大阪市文化財協会

「南住吉遺跡発掘調査報告」1998. 10 (財) 大阪市文化財協会

大和川今池遺跡では、1977（昭和52年）の発見以来、今池処理場や府営住宅、道路建設、大和川高水敷整備などで40次以上の発掘調査が実施されており、それらの成果については、岩瀬透氏、後川恵太郎氏などによって詳述されている。特に、後川氏は、時代順に調査地点ごとの遺構傾向を丁寧に纏められている（「大和川今池遺跡（その1・その2）」。参照していただきたい。



第3図 これまでの調査地点（アミ　今回調査地点）

表1 大和川今池遺跡の刊行図書

番号	収録書名	刊行年
①～②	「大和川・今池遺跡」 第1地区発掘調査報告書	1979年 大和川・今池遺跡調査委員会
	「大和川・今池遺跡」 発掘調査資料その4	1979年 大和川・今池遺跡調査委員会
	「大和川・今池遺跡」 第3～5地区発掘調査報告書	1980年 大和川・今池遺跡調査委員会
	「大和川・今池遺跡」 発掘調査資料その2	1980年 大和川・今池遺跡調査委員会
	「大和川・今池遺跡」 第6～8地区「古道」発掘調査報告書	1981年 大和川・今池遺跡調査委員会
	「大和川・今池遺跡発掘調査概要」 昭和59年度	1983年 大阪府教育委員会
⑩～⑪	「松原市史跡発掘調査概要」 昭和60年度	1984年 松原市教育委員会
⑫～⑯	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅱ」	1985年 大阪府教育委員会
⑰	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅲ」	1986年 大阪府教育委員会
⑱	「松原市史跡発掘調査概要」 昭和61年度	1986年 松原市教育委員会
⑲	「松原市史跡発掘調査概要」 昭和61年度	1987年 松原市教育委員会
⑳	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅳ」	1988年 大阪府教育委員会
㉑	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅴ」	1988年 大阪府教育委員会
㉒	「松原市史跡発掘調査概要」 昭和62年度	1989年 大阪府教育委員会
㉓	「松原市史跡発掘調査概要」 昭和63年度	1989年 大阪府教育委員会
㉔	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅵ」	1990年 大阪府教育委員会
㉕	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅶ」	1990年 大阪府教育委員会
㉖	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅷ」	1990年 大阪府教育委員会
㉗	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅸ」	1991年 大阪府教育委員会
㉘	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅹ」	1992年 大阪府教育委員会
㉙	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅺ」	1993年 大阪府教育委員会
㉚	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅻ」	1995年 大阪府教育委員会
㉛	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅼ」	1996年 大阪府教育委員会
㉜	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅽ」	1997年 大阪府教育委員会
㉝	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅾ」	2000年 (財)大阪府文化財保護研究センター
㉞	「大和川今池遺跡発掘調査概要Ⅿ」	2001年 (財)大阪府文化財保護研究センター
㉟	「大和川今池遺跡発掘調査概要ⅰ」	2002年 (財)大阪府文化財保護研究センター



- | | | | | |
|-------------|-----------------|---------------|--------------|------------|
| 1. 大和川今池遺跡 | 2. 依綱池都定地 | 3. 豊波大道（大阪市側） | 4. 豊波大道（堺市側） | |
| 5. 北花田遺跡 | 6. 東浅香山遺跡 | 7. 我堂南遺跡 | 8. 鶴塚古墳 | 9. 高木遺跡 |
| 10. 堀遺跡 | 11. 清水遺跡 | 12. 布忍遺跡 | 13. 畦田遺跡 | 14. 南新町遺跡 |
| 15. 河合遺跡 | 16. 青堂遺跡 | 17. 新金岡3丁目遺跡 | 18. 大津遺 | 19. 斎堂町遺跡 |
| 20. 五個荘東遺跡 | 21. 歯前町遺跡 | 22. 奥本町遺跡 | 23. 今池遺跡 | 24. 金岡公園遺跡 |
| 25. 東浅香山西遺跡 | 26. 東花田遺跡 | 27. 大豆塚古墳 | 28. 北長尾遺跡 | 29. 南田出井遺跡 |
| 30. 山之内遺跡 | 31. 直里小野遺跡 | 32. 天美南遺跡 | 33. 茂内遺跡 | 34. 城道寺遺跡 |
| 35. 住道寺遺跡 | 36. 中臣須率知持社境内遺跡 | 37. 矢田邵遺跡 | 38. 新堀城跡伝承地 | 39. 我孫子城 |
| 40. 寺洞岩跡 | 41. 南住吉遺跡 | 42. 津守魔寺 | 43. 荘厳淨寺境内遺跡 | 44. 城蓮寺東遺跡 |

第4図 大和川今池遺跡周辺の遺跡

第3章 調査の方法と調査結果

第1節 調査の方法

1. 位置表示と地区割について（70ページ参照）

遺構の位置については、国土座標の平面直角座標系の東経136°、北緯36°（若狭湾内にある。）を基点とする国土座標軸第VI系を使用し、基点からの距離をX、Y（基点の南西に当たるのでそれぞれ-の数値）で表示する。また、区画割りについては財團法人大阪文化財センター（現、財團法人 大阪府文化財センター）が規定した「遺跡調査基本マニュアル」に則っている。これは大阪府の都市計画図（1/2500）を使用して、遺跡・遺構の座標位置を共通した方法で表示できるように、大小4段階の区画を設定するものである。

第I区画は1/10000地形図の地区割り図をそのまま利用したもので、縦6km、横8kmが1区画となる。緯度、経度がもっとも小さな南西端を基準に、縦軸をA～O、横軸を0～8で表示する。第II区画は1/2500都市計画図の地区割りを利用したもので、第I区画を縦1.5km、横2.0kmの大きさに16分割し、南西端を1とし、北東端を16番とする西から東へ平行方式の地区表示である。第III区画は第II区画内を100m単位で区画するもので、縦（南北）1.5kmを15区画、横（東西）2kmを20区画に区分し、北東端を基点に縦を北からA～O、横を東から1～20で表示する。第IV区画は100m四方の第III区画の1単位をさらに10m単位で区画するもので、北東端を基点に縦軸を小文字のa～j、横軸を1～10で表示する。

『基本マニュアル』では第V区画として、必要に応じて10m四方をさらに四分割することになっているが、今回の調査では第IV区画までを利用して地区を表示した。

今回は水処理施設、雨水ポンプ場、砂濾過連絡管渠の各築造予定地で調査を実施した。水処理施設は調査除外地の今池貯水部を挟んで南調査区・北調査区の2カ所に分かれている。溜池東部に南から長く伸びていた穴堤部も南北30m、幅10mの範囲で調査を実施した（南その2）。

第III区画（100m単位）までの各地区の位置は

水処理施設北調査区が、F 5 - 15 - G 15 -

水処理施設南調査区が、F 5 - 15 - I 15 -

砂濾過調査区が、F 5 - 15 - I 16 -

雨水ポンプ場が、F 5 - 15 - E 14 -

となっている。

遺構位置は国土座標数値（世界座標系）で表示した。本文中の北は「座標北」で、調査地点では真北から西に0° 15' 39" 振っている。

水準点は東京湾平均海水面（T.P.）を使用した。

第2節 調査結果

1. 水処理施設南調査区

基本層序

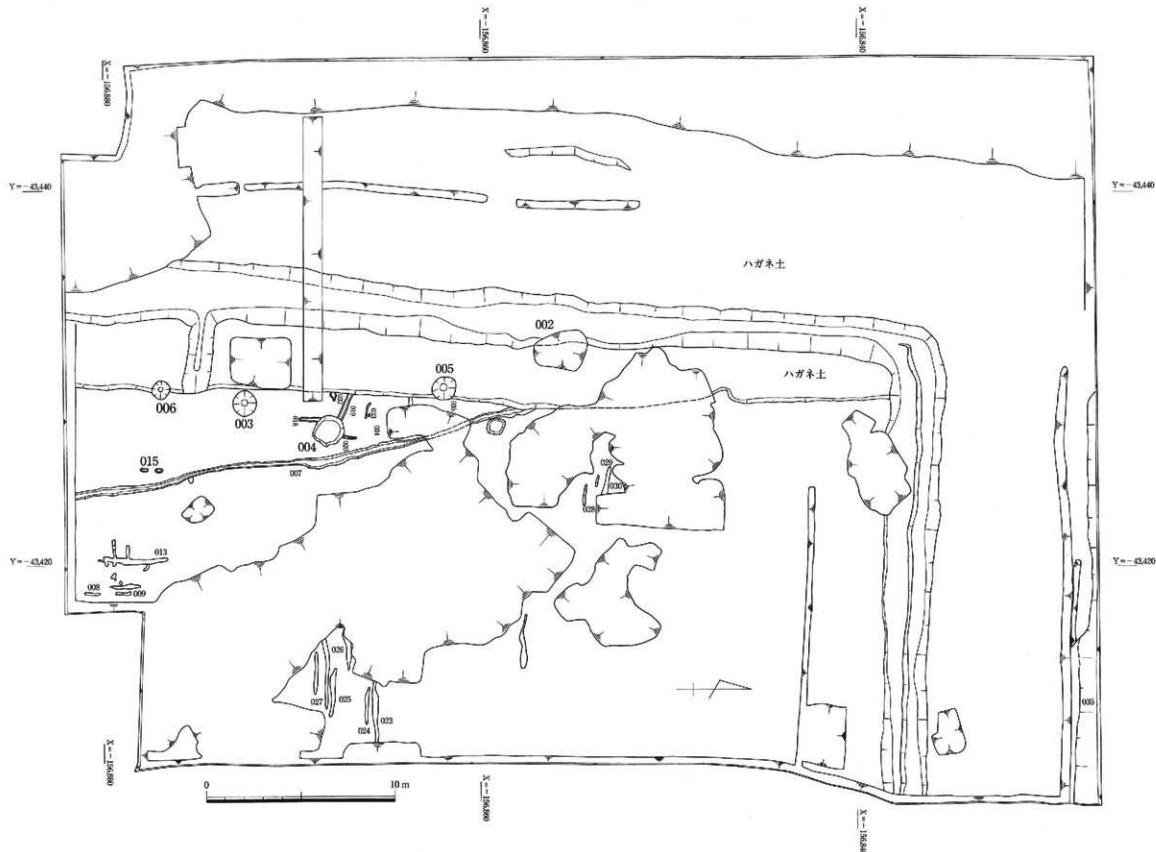
旧今池は約200m四方の主池の東北側に南北約110m、東西約50mを測る副池を持つ「匁」字形の溜池で、本池と副池の間に長さ80mの突堤を残している。南（その1）調査区は「匁」字形に囲まれた南東堤南側の東西約36m、南北約50m四方が調査対象となった。

今回の調査地は1970年頃まで養鶏場や松原市の産業廃棄物仮処分場として利用されていた。その後、下水処理場用地となってからは、各施設築造工事で発生した土砂の仮置場となっており、産業廃棄物や掘削残土が旧地表面から4m近い高さまで盛土されていた。このため、発掘調査前に事業者側でT.P.10mまで盛土を除去し、その後に旧耕土まで文化財側で掘削することとなった。このため正確な位置を復元することができなかった今池の堤体も盛土除去時に削平されたこととなり、堤体内の遺物採集や断面観察は下層部分のみとなった。

第9図の031-SK断面図の上層がこの付近の遺物包含層で、T.P.9.6mより上は産業廃棄物などが混ざった擾乱土や整地土であった。

① 10YR 6/1褐色粘土は、15cm以上の厚さを測る。中世頃までの遺物包含層であるが、出土量は少ない。②は①に10YR 4/4褐色粘土がブロック状に混ざった層。③ 10YR 5/1褐色粘土は①よりやや暗い土壤である。

地山は10YR7/8黄褐色粘土であるが、地表面は風化が進み灰白色化している。



第5図 水処理施設南調査区遺構平面図

遺構

調査区の西側と北側に今池の堤体が存在していた。堤体下層は堤体補強と土壤改良のための掘り込み（ここでは「ハガネ土」と呼ぶ。）があり、地山が削平されていた。また、基本層序でも記したように、現代の擾乱が大きく、中世以前の遺構面が保存されていたのは、全体の1/3程度であった。中世と近世の溝、ピット、井戸等を検出した。

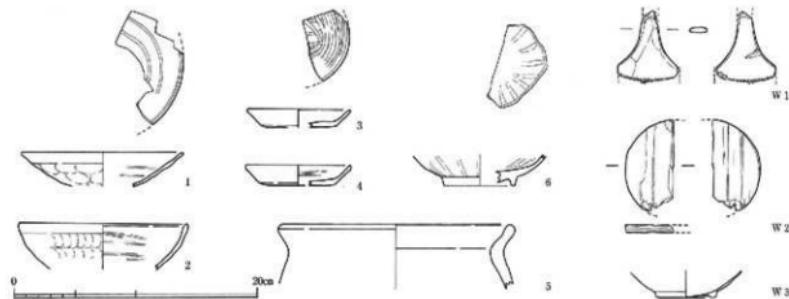
002-S D（第5図）

今池の外堤部に掘られていた溝で、堤の修復作業を通じて、近世後期以降に堤内に取り込まれた溝である。この調査区では機械的にT.P.10mまで表土を除去し堤体上部も削平されたため、溝の正確な掘削面は不明である。ハガネ土はこの溝の2~3m東から掘り込まれており、002-S Dは段状に構築された堤のテラスに造られていたものが、堤体修復の過程で廃棄され、堤体内に取り込まれたと考えられる。古文書等で確認することはできなかったが、西除川が今池の南側に付け替えられたのと相前後して、堤体の改造が行われたのではないかと考えている。溝内から近世の陶磁器や曲物の底板、漆器碗などが出土している。

出土遺物（第6図）

南地区堤体内の002-S Dからは近世を中心に、古墳時代から中世までの土器もわずかに出土している。

1、2は瓦器碗、口縁部外面はヨコナデ、体部はユビオサエが残る。見込みは壁面にそって数条の暗文を巡らせている。3、4は瓦器の小皿、平らな底面から短く開いて立ち上がる口縁部を付ける。3は内面に密な暗文施す。5は土師器甕の口縁部である。「く」の字形に外反する口縁端部は外傾する面をつける。6は近世の陶器碗の底部で、内外面に縦縞を描く。近世中期以降のものであろう。この他にも近世の染付けや陶器類が多数出土しているが、すべて17世紀後半以降のものである。



第6図 水処理施設南調査区出土遺物実測図

W 1 から W 3 は木製品である。W 1 は縦横で歯はすべて欠けている。現存幅5.2cm、厚さ4mmを測る。A面には工具の加工痕が残るが、B面は平滑に仕上げられている。W 2 は曲物の底板である。現況で長さ7.5cm、復元すると直径9cm前後になる小さな底板である。W 3 は黒漆の漆器椀の底部である。輻轆挽きで器壁は薄く仕上げられており、高台径5.1cm、現存高2cmを測る。近世のもの。

003-SE (第6図)

堤体の東側、X = -156.873m、Y = -43.429m付近で検出した、ほぼ垂直に掘り込まれた素掘り井戸である。平面形はほぼ円形で、直径1.35m、深さ0.95mを測る。埋土は灰色粘土、灰色粘土と地山の黄褐色粘土のブロック土で人為的に埋められたことを示している。

遺物は出土していない。近世以降に掘られた野井戸であろう。

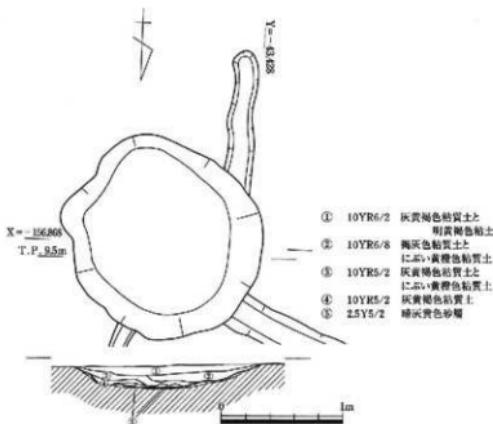
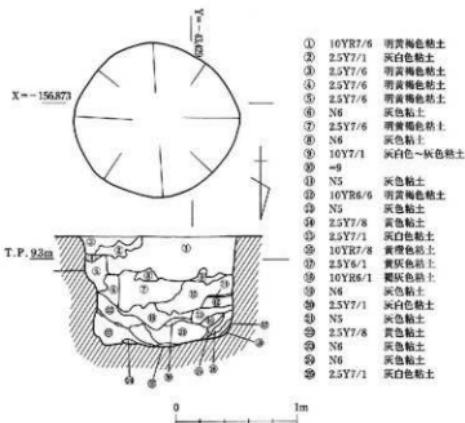
004-SK (第7図)

X = -156.868m、Y = -43.428m付近のハガネ土の東側で検出した歪な円形に近い土坑である。堀方は浅い皿状で、直径約1.4m、深さ0.2mを測る。埋土は地山が風化したような灰黄褐色土と黄褐色土で、遺物は出土していない。

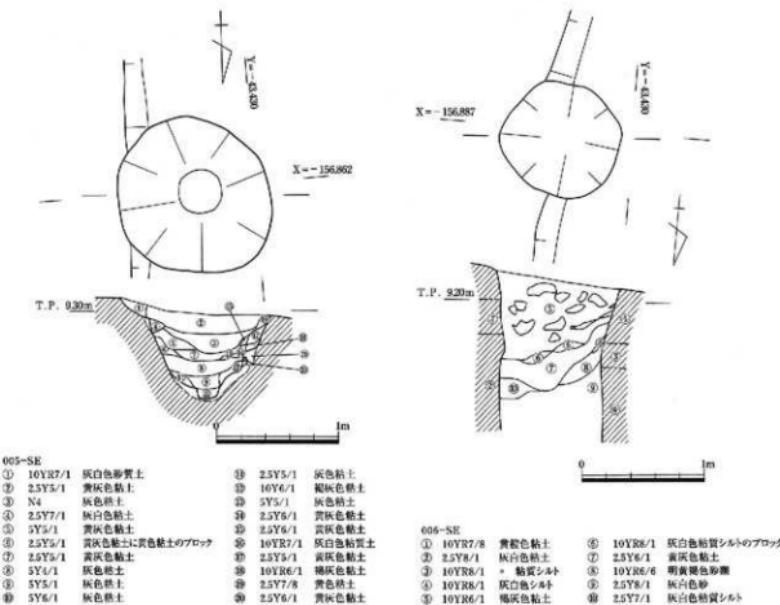
後述する031-S Pと同様に、中世の遺構と考えられる。

005-SE (第8図・左)

調査区のはば中央、「ハガネ土」の肩部で検出した井戸である。002-S Dと同じ様に堤体のテラスから掘り込まれていたと思われるが、堤体部分の掘削中に堀方を確認することができず、地山面まで掘り下げ、精査時に検出した。平面形はやや歪んだ円形を呈し、直径1.25mを測る。平面形は掘り鉢形で、検出面からの深さは0.8mを測る。埋土は主に明度が異なる灰色粘土で、凹レンズ状に堆積している。壁面近くに地山から流出した黄色系粘土が観察されるので、滲水状態で粘土が徐々に沈殿したと考えられる。遺物は出土しなかったが、近世のものであろう。



第7図 003-SE(上)・004-SK(下)断面図



第8図 005-SE(左)・006-SE平面面図(右)

006-S E (第8図・右)

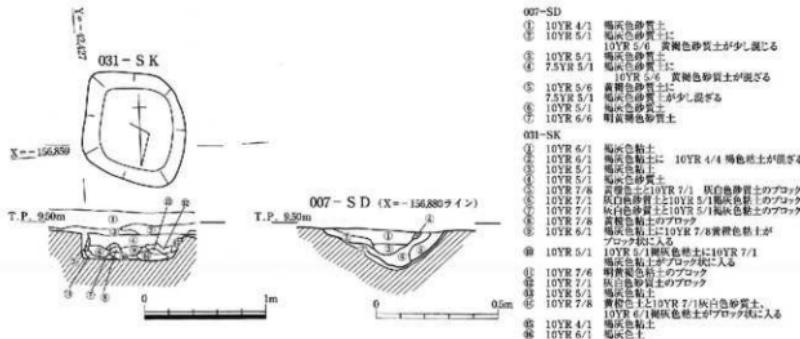
堤の裾部に掘られた井戸である。006-S E、007-S Eに比べてやや小さく、径 0.8×0.9 mの楕円形を呈する。深さは約1.2mまで掘り下げたが、底面には達しなかった。埋土は灰色粘土、青灰色粘土、黄褐色粘土のブロック土で、人為的に埋められたと考えられる。遺物は出土しなかつたが、近世～近代に掘られた井戸と考えられる。

007-S D (第9図・右)

調査区南から北西に流下し、今池堤体下に達する長い小溝である。幅25～50cm、深さ5～20cmを測る。埋土は主に褐灰色砂質土で、溝内から遺物は出土しなかった。今池より古い遺構である。埋土から中世頃に掘削されたと考えられる。

031-S K (第9図・左)

調査区の中央、X = -156,860m、Y = -43,427m付近で検出したピットである。僅かに歪んだ方形で、長さ0.9m×0.8m、深さ0.2mを測る。地山の直上に薄く堆積する褐灰色土（遺物包含層）を除去した面で検出した。埋土は主に褐灰色粘土で、地山のブロック土混入状態から12層が観察された。遺物は出土していない。周辺で同様のピットを検出することはできなかった。時期、性格は不明である。



第9図 007-SD(右) 平面図・031-SK(左) 断面図

008~030-S D (第4図)

堤体の東側で検出した耕作溝で、幅20~40cm、深さは5cm以内におさまる。遺構面の擾乱が大きく、残っていた耕作溝は僅かであるが、南北方向に掘られたものは調査区南端に多く、東西方向の耕作溝は堤体東側の各所で観察される。

035-S D (第4図)

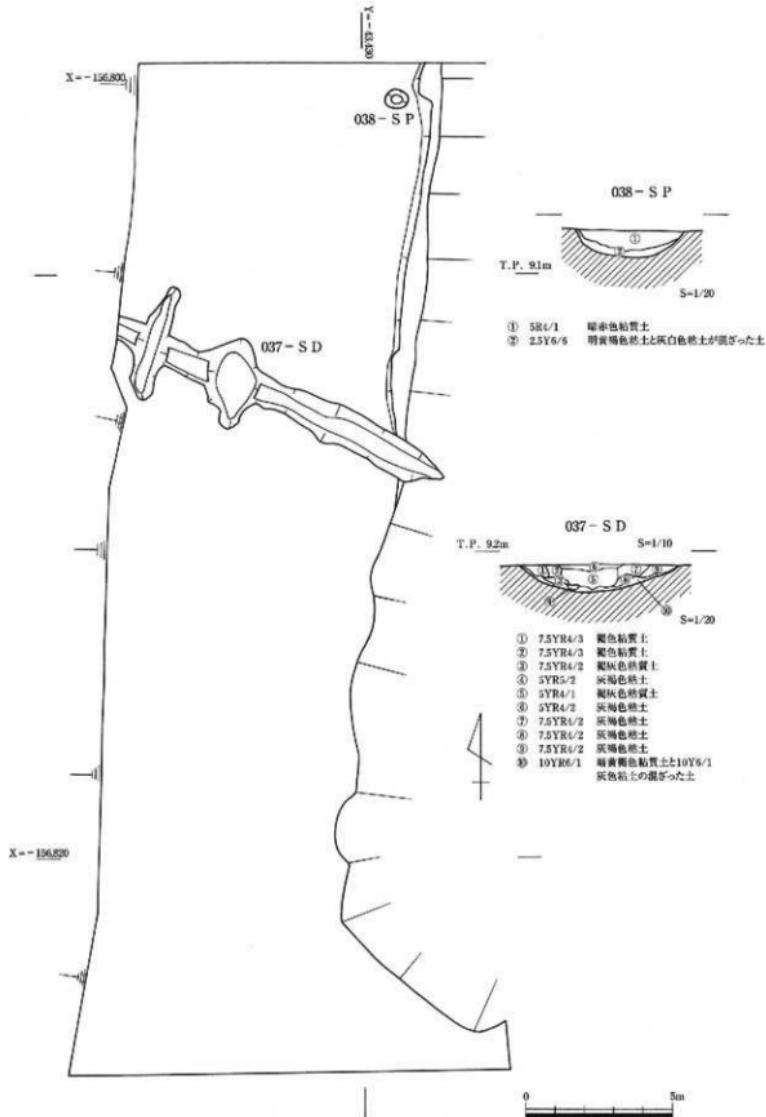
調査区北端の地表面で検出した東西方向の溝である。幅は、北側が調査区外にあるが、0.5m以上、深さは「ハガネ土」のため浅く削られているが、検出面から0.2mを測る。遺物は出土していない。

南調査区のまとめ

南調査区は産業廃棄物処理時の擾乱が大きく、遺構面の残存状況は良くなかったが、それを考慮しても検出された遺構は少ない。南調査区の南側で87年に調査されたB地区（用水処理棟地区）（『大和川今池遺跡発掘調査概要V』1988. 3）でも遺構は少なく、耕作溝や、井戸、性格不明の土坑が検出されたのみであった。今池築造時までは、僅かに生活痕跡が確認できる程度の荒れ地で、今池築造後に水田化された地域であろう。

2. 南その2 調査区（第10図）

今池の南から北に突堤状に延びる調査区である。「今池」についての史料が少なく、今池が築造当初から本池と、突堤で区画される副池を持つ構造であったのか、築造当初は2町四方の方形で、後に1町半×半町の副池が東北部に造られたのか、突堤部を調査し、記録に残す必要があること。また、南調査区の調査結果から、堤体下層は南東側地山の削平が浅く、今池築造以前の遺



第10図 南その2調査区平面図、037-S D、038-S P断面図

構が残っていると推定されたため、発掘調査範囲に含めた。

この調査区は前回工事の際に行われた土壤改良工事（ケミカルコンクリートによる土壤硬化）のため突堤西裾側は擾乱されていた。調査範囲は東西約9m、南北約20mであった。

層序

この地区的基本層序は、堤体築造土と東側裾部斜面に堆積する泥土からなる。泥土は今池廃棄直前まで堆積していたもので、青灰色から黒褐色のヘドロ層である。

堤体構成土は主に地山の黄灰色粘土である。土の盛り方に版築など特別な手法は観察されないが、遺物包含層の灰褐色土や褐灰色土、砂礫は殆ど含まれず、土は比較的均質な粘質土が積み上げられている。断面に目立った層の変化が見られないことから、蒲鉾状に形を整えながら敷き均す程度であったと考えられる。下層の黄灰色土は、貯留水が浸潤して還元状態にあり、やや青みがかった黄灰色を発していた。

遺構

この調査区では「ハガネ土」の下層掘り込みは浅く、5~10cm前後である。このため少し深い遺構は残存しており、溝と土坑、ピットを検出した。

037-S D

調査区中央、X = -156.803m、Y = -43.435m付近で検出した東南~北西に走る溝である。幅約1.1m、深さはハガネ土の影響で地山が浅く削られているが、検出面で0.15~0.2mを測る。埋土は暗褐色粘土、灰褐色粘質土で、下層は細かいブロック状に観察された。遺物は出土しなかった。

この溝内で溝に直交するように掘られた歪な楕円形を呈する土坑を2基検出した。埋土が同じ暗褐色粘土で、表面や断面を精査したが、溝との前後関係を観察することはできなかった。本遺跡内では過去の調査でも報告されている溝内土坑と考えられる。西側が3.9m×1.0m、東側は歪んだ形状であるが3.1m×2m前後を測る。土坑は溝より0.1m前後深く掘られている。土坑からも遺物は出土しなかった。

038-S P

調査区東北端で検出したピットである。東西に長い歪な楕円形を呈し、長径0.75m、短径0.6mを測る。埋土は2層で、暗赤色粘質土、灰白色粘土である。遺物は出土していない。

3. 雨水ポンプ場調査区

この調査区は、雨水ポンプ場⑯と西側道路⑰の間である。雨水ポンプ場を増築することになり、未調査部分の有無を確認するため平成14年5月に試掘調査を実施した。その結果、増設予定地西南端に、南北30m、東西7mの範囲で未調査部分の残っていることが確認されたので、同年7月に発掘調査を実施した。厚さ4m近い盛土を除去したところ、調査予定地の中央に幅約2.5mの南北水路が確認され、この部分は地山より0.5m以上下まで擾乱されていたので、実際の調査面積はさらに狭小なものとなった。

土 層

この調査区では耕土は残っていないかった。

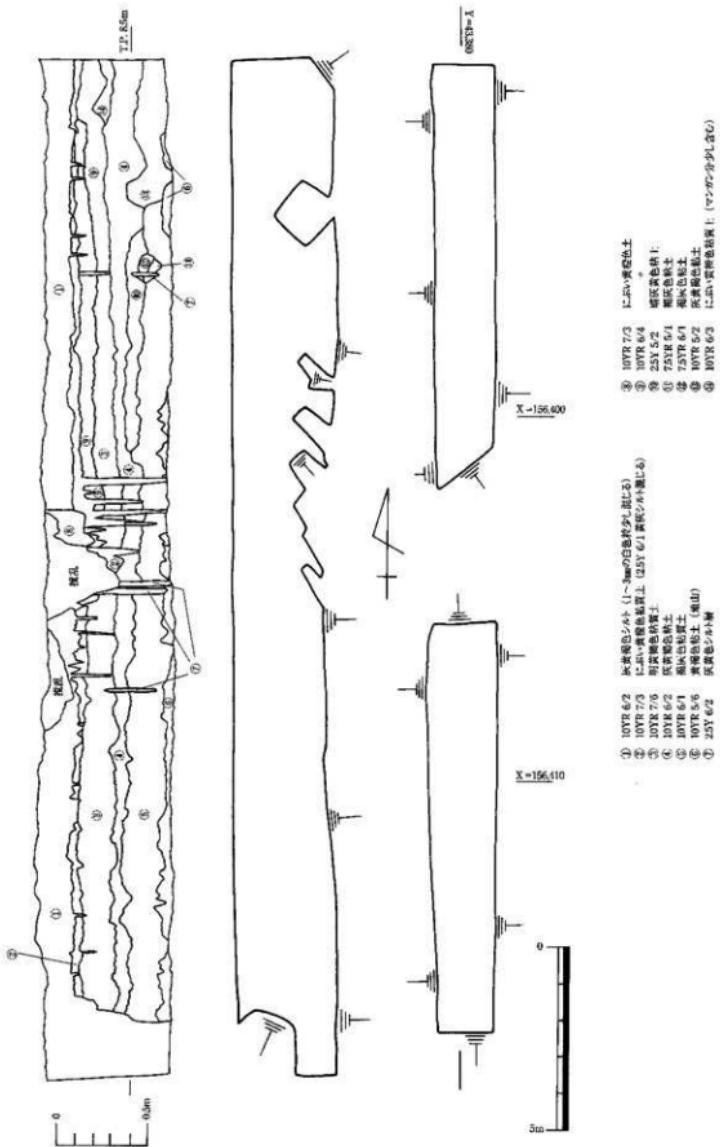
①灰黄褐色シルト層以下各層は緩やかな凹凸はあるがほぼ水平に堆積し、きわめて安定した堆積状況を示している。①層や②層にぶい黄橙色土から杭を打ち込んだような⑦層は、旱魃時にできたクラックに流れ込んだ灰黄色シルト層である。①、②層から遺物は出土していない。

③層明黄褐色、④灰黄褐色粘土層は鎌倉時代頃の土器片が出土する。

T.P.8.3m～8.5m付近に堆積する⑤褐灰色粘質土（10YR 6 / 1）は古墳時代～平安時代頃までの遺物包含層である。調査区の中央に水路跡があり、調査範囲が狭小だったこともあり、遺物は少なく、須恵器や土師器の小片が10数点出土しただけであった。

遺 構

この調査区は、日下氏の地形分類では、旧西除川が形成した氾濫原で、場所によっては埋没河川が存在したと推定されている所である。遺構面はT.P.8.3m前後に堆積する黄褐色粘土（10YR 5 / 6）層上面で、調査区の中央は幅約2.5mの水路跡により大きく擾乱されていたものの明白な遺構を確認することはできなかった。南側の④調査区では、中世の条里畦畔や近世頃の耕作井戸などの遺構から、水田が広がっていたと推定されている。この調査区で畦畔を確認することはできなかったが、①、②層に観察されるクラックから、中世頃までは荒蕪地か未耕作地で、水田化されたのは中世後半以降と考えられる。



第11図 雨水ポンプ場調査区断面図

4. 水処理施設北調査区

堤体北側の調査区で、東西36m、南北約90mの広さを測る。約3mの盛土は調査前に事業者が除去したが、今池の堤体も同時に削平され、堤体断面は下層部分のみ観察した。

基本層序

第13-下図はfライン(X=-156.660m)の断面図である。現地表面は、T.P.14m前後で、盛土や産業廃棄物が3m以上の厚さで堆積している。T.P.9.5mまでは事業者が除去し、その後、旧耕土が堆積するT.P.9.1~9.2mまでは重機により掘削している。

①、②、⑤層は灰白色から灰色の砂質土で黄褐色土が混入している。古墳時代から中世までの遺物を含む量は少ない。①層と②層は②層がやや黒みが強い程度の色相差である。③、⑪灰色粘質土は遺物包含層で、古墳時代から鎌倉時代の土器が出土している。銅鏡もこの層から出土している。①、②層と③、⑪層との色相や土質の差は壁面を両刃鎌等で削ると視覚的にも感覚的にも明瞭に区別できる。⑩層は黄褐色粘質土に褐灰色土が混入する。中世頃の遺物包含層であるが出土量は少ない。⑯層は微高地の上に堆積する遺物包含層で、平安時代までの土器が出土する。地山はY=-43.440mより東側ではT.P.8.7~8.8mを上面とする2.5Y7/6~7/8の明黄褐色~黄色の粘土、Y=-43.440mより西側では弥生時代以前の河道が形成した微高地があり、T.P.8.9~9m前後を上面とする褐灰色砂質土である。

第13図上は北調査区南部西壁の土層図である。①~⑭層は堤体下層のハガネ土で灰黄褐色土や黄灰色土に区別される。①、②、③、⑦層は薄状に分層されたが、これは堤体下面で検出された811-S Eの影響で堤体より土壤の還元が進んだためと考えられる。

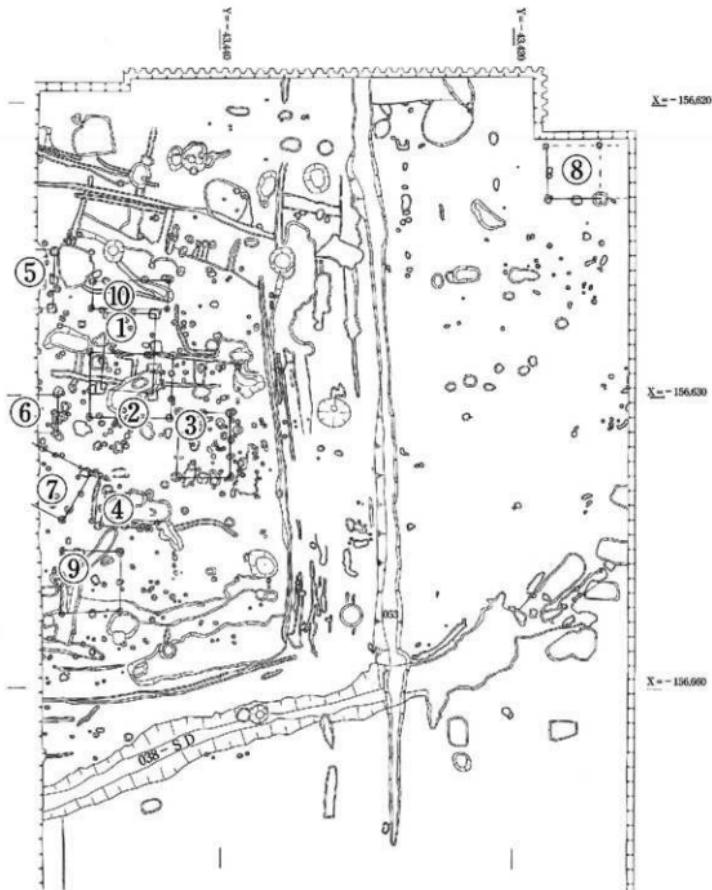
⑯灰黄褐色粘質土、⑭にぶい黄橙色土、⑮にぶい黄褐色土等はすべて中世までの遺物を含む層である。地山が南に傾斜しているのは、堤体築造時に周辺を掘削した影響と考えられる。各土層で古墳時代から鎌倉時代頃までの土器が出土しているが、量は少ない。⑯~㉑層は近世の溝に堆積した粘土やシルトである。㉑~㉓層は古墳時代後期の溝(188-S D)の堆積層で、黒褐色や灰黄色の粘土層により埋没している。

水処理施設北調査区の遺構(北調査区)

北調査区では、堤体のある南部と、中央から東側は地山が黄橙色から黄褐色粘土で、窪みが多い多數検出された。輪郭が明確なものについては遺構番号を付して断面観察を行ったが、深さ2, 3cm程度のものが多く、足跡や耕作等に起因し、有意なものとは考えられなかった。北西部の約1/4は東西約20m、南北約45mの範囲は、東側より約20cm高い微高地が形成されている。土質も水捌けが良好な砂質土で、ピットや井戸、土坑などの遺構が集中していた。この地区の遺構検出面のベースとなっているのは褐灰色砂質土であるが、この直上に暗灰色から黒色を呈する粘質土が薄く堆積していた。この層は1cm程度の厚さで、遺構の中にはこの黒色土上面から掘り込まれたものもあるが、黒色土と遺構埋土との識別が難しく、精査を繰り返すとベースの褐灰色土に達してしまうため、結局は最終面ですべての遺構を作図することとなった。この面では古墳時代後期か

ら平安時代前期頃までの遺構を確認しているが、遺構埋土に各時期の特徴的な差は観察されない。建物跡

復元した建物跡はすべて掘立柱建物である。調査区北東角の粘質土上で1棟（建物8）復元することができたが、他はすべて微高地上で検出した。



第12図 北調査区建物跡位置図

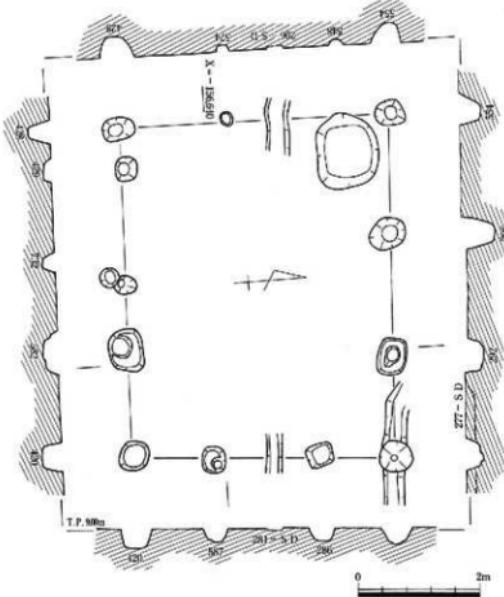
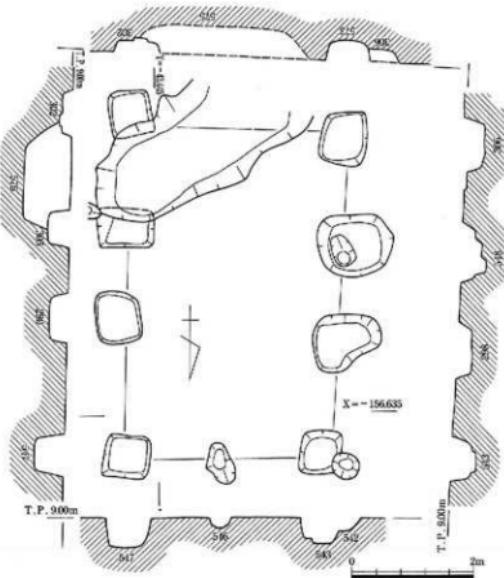
建物 1

微高地中央のやや北寄り、
 $X = -156,635m$ 、 $Y = -43,445m$
 付近で検出した掘立柱建物である。建物は、南北の桁行き 3 間、
 梁間 1 間の南北棟である。主軸は
 $N - 5^{\circ} - E$ で、わずかに東に振
 っている。

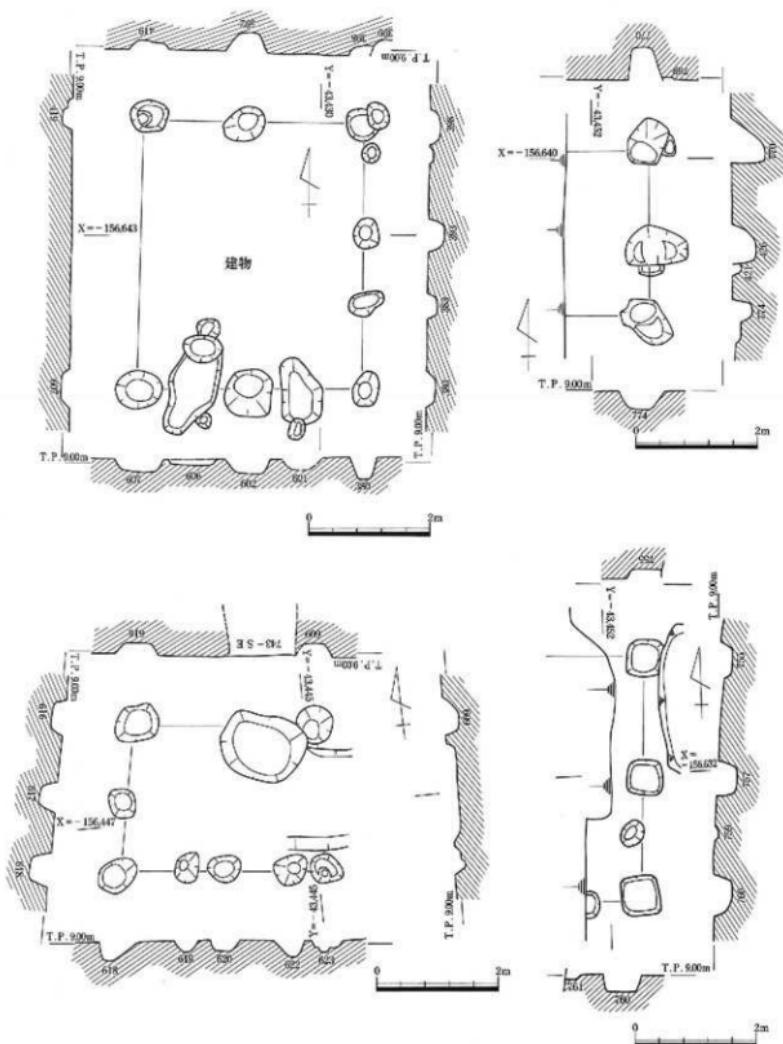
柱間間隔は、東列が、北から 2.2
 m、1.6m、1.8m、2.2m、西列は 2
 m、1.6m、1.8m、2m、梁行きは
 3 m を測る。柱穴の掘形は方形か
 精円に近い方形で、北西角の
 543-S P の北西に重なる小ビット
 は、図面では精円形の輪郭を描く。
 抜き取り穴か。南隣の 298-S P
 も柱を抜き取った影響で歪な
 形状になったと見られる。546-S P
 は梁ライン上に乗っているが
 堀方が浅く、歪な形状であること
 からこの建物に伴うものでは無い
 かも知れない。埋土は地山の黄橙
 色土をブロック状に含む、黒褐色
 や地山が風化した灰白色粘土であ
 る。302、305-S P 検出時には土
 坑 575-S K の埋土が黒褐色粘土
 で、精査時に掘形の輪郭を識別す
 ることはできず、断面図から復元
 した。302、305-S P から 8 世紀
 代の土器が出土している。

建物 2 (第14図下)

建物 1 の南側で重複して検出した
 掘立柱建物である。西側と南側
 柱列は小ビットが重なり不明瞭で



第14図 建物 1 (上)・建物 2 (下) 平断面図



第15図 建物3（左上）・建物4（左下）・建物5（右下）・建物6（右上）平面面図

あるが、東西の桁行き4間、梁間3間の規模で、桁桁の長さ7.4m、梁間は4.4m、柱間隔は、北側柱列が西から、1.9m、2m、2m、1.7m、東柱列が1.7m、1.7m、1.6mを測る。主軸方向は、ほぼ東西を示す。ピットの掘形は円形ないし隅丸方形で、径0.5m～0.7m前後を測るが、3回の重複が観察された426-S Pでは長径1.1mを測る。295、582、412、426-S Pから土師器、須恵器の小片が出土しているが時期は特定できない。

建物 3 (第15図左上)

建物 2 の南東で復元した南北の桁行き 3 間、梁間 2 間の掘立柱建物である。西側柱列は不明瞭である。柱間隔は東側南北列が北から 1.8m、1.3m、1.6m、北側列が 1.8m 前後を測る。ピットの掘形は北・南列は歪な楕円形を呈するものが多く、長径 0.5~0.8m を測る。ピットの埋土は主に褐灰色からにぶい黄褐色土で、時期を特定できる遺物は出土しなかった。

建物 4 (第15図左下)

奈良時代頃の浅い土坑 446-S K に重複して検出した掘立柱建物である。2 間 × 2 間で復元したが、ピットの大きさが不揃いで、北側、東側の中間柱を確認することはできなかった。規模は東西 3.5m、南北 2.5m を測る。柱間寸法は西側列が 1.2m、1.9m、1.7m を測る。建物は、446-S K の約 2/3 を覆う形で柱が配置され、土坑内では柱痕は確認されなかった。土坑は、地山を約 5 cm 堀り下げ、底面は平坦である。埋土から土器以外に出土したものが無く、断定はできないが、作業場的なもので、柱列は作業場を覆う屋根と推察される。ピット埋土は褐灰色砂質土で、時期を示す遺物は出土しなかった。

建物 5 (第15図右下)

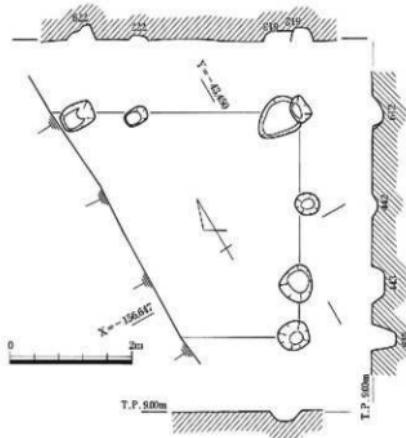
調査区の西北部で検出した。南北 2 間の掘立柱建物で、西側は調査範囲外にある。建物の規模は南北 2.1m、柱間寸法は北から 1.1m、1 m を測る。柱軸はほぼ南北を示す。東西の柱間隔は、西側の法面に掘形を確認できないので、1 m 以上は存することになる。ピットの掘形は整った方形を示し、径 0.6m 前後を測る。ピット内から時期を示す遺物は出土しなかったが、掘形の形状から奈良時代頃のものと考えられる。

建物 6 (第15図右上)

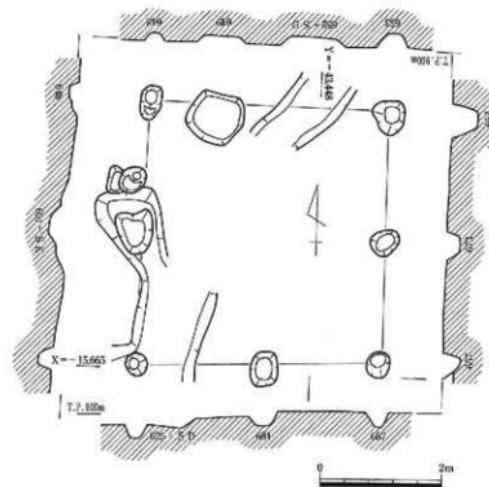
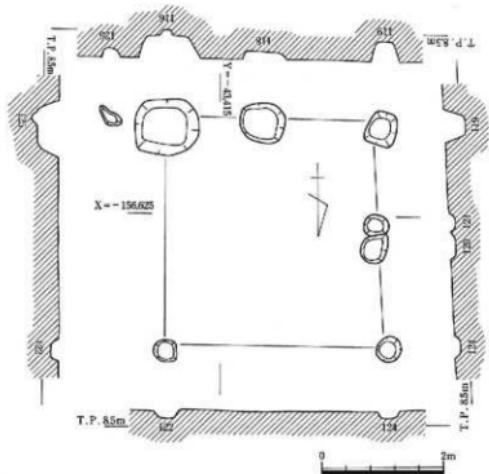
調査区西端中央で検出した南北 2 間の大型ピットからなる掘立柱建物である。建物 5 と同じく、東西列は調査範囲外にある。建物の規模は 3 m を測り、柱間寸法は北から、2 m、1 m を測る。柱軸はほぼ南北を示す。ピットは歪な方形や 3 角形を呈するが、掘形は明確で、径 0.8~0.9m 前後を測る。中央の 442-S P は掘削時の平断面観察では 3 回の掘り直しが観察できた。南端の 772-S P 南側に抜き取り孔がある。ピットの形状から奈良時代頃と考えられる。

建物 7 (第16図)

建物 4 の西側で析出した掘立柱建物



第16図 建物 7 平断面図



第17図 建物8（上）・建物9（下） 平断面図

したが、 $1\text{m} \times 0.8\text{m}$ 、深さ 0.3m 、柱痕は約 0.2cm であった。北側のピットはいびつな形状であるが、 $0.3\sim 0.35\text{m}$ を測った。各ピットから遺物は出土していない。

建物9

建物4の南側で検出した2間四方の掘立柱建物である。西側は溝状の遺構625-S Dと重なり検出できなかった。建物の規模は $4\text{m} \times 4\text{m}$ で、やや歪んだ方形プランを示すが、東側の柱軸は

で、2間×1間を復元したが、西側に2間分以上大きい可能性がある。建物の規模は東西 2m 、南北 3.2m で、柱間寸法は 1.3m 、 1.9m を測る。主軸の方向は $N - 22^\circ - E$ を示す。この建物が西側に2間以上大きい場合、東西軸は 6m 以上を測ることになる。ピットは歪な円形で、径は $0.4\sim 0.7\text{m}$ の範囲内にある。ピットの埋土は褐灰色から灰色の砂質土で、時期を特定できるような遺物は出土しなかった。

建物8（第17図上）

北東隅で検出した掘立柱建物である。北側は調査区外に広がっているが、東西2間（ 3.8m ）、南北2間（ 3.9m ）以上を測る。主軸はほぼ南北をしめす。南東の2カ所のピットは方形で、南東角のピットでは柱痕も確認できたが、他のピットは歪で小さい楕円形を呈し、掘形も浅い。柱間寸法は東西が $2\text{m} \sim 2.2\text{m}$ 、南北が 2m を測る。 $116 - S P$ は地山が粘土で、検出後の雨と干天のため実測までにやや拡大

ほぼ南北を示す。柱間寸法は南側柱列が2.1m、1.9m、東側が2m、2mを測る。ピットの形状は歪な円形ないし楕円形で、長径70cm前後を測るものが多い。各ピットから時期を特定できる遺物は出土しなかったが、他の遺構との前後関係から平安時代頃のものと考えられる。

建物10

建物1の北側で確認した東西の桁行4間、梁間1間の掘立柱建物で、規模は5.3m×2mを測る。柱間隔は北側列が西から1.0m、1.0m、1.6m、1.8m、南側列が西から0.8m、1.2m、1m、2.3mを測る。ピットの掘形は歪な円形で、北側列は径0.45~0.6m、南側列はやや小さく0.4~0.5mを測る。

建物1の周辺は、地山の上に漆喰壁のような灰白色土と黒褐色土が攪拌されたような土層が薄く広がっており、建物10の柱穴はこの土層の上面で検出した。

この他、 $X = -156,630 \sim -156,650$ m、 $Y = -43,435 \sim -43,450$ mの範囲で200個以上のピットを検出している。図面上で建物の復元を試みたが、2間、3間の規模以上のものでは対応する柱列が不揃いであったり、確認できないものが多く、無理な復元はしなかった。

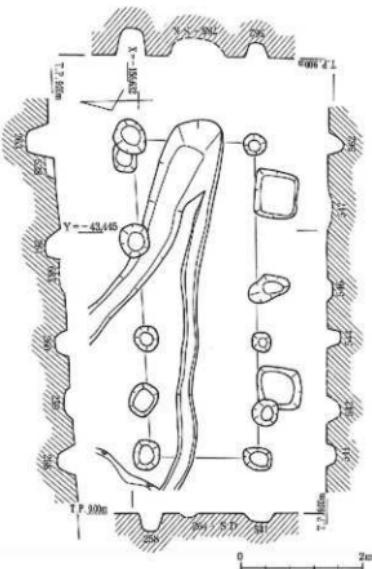
また、復元した建物跡の方位は、長軸や短軸が真北から数度以内の範囲に取まるものが多い。

土坑、溝

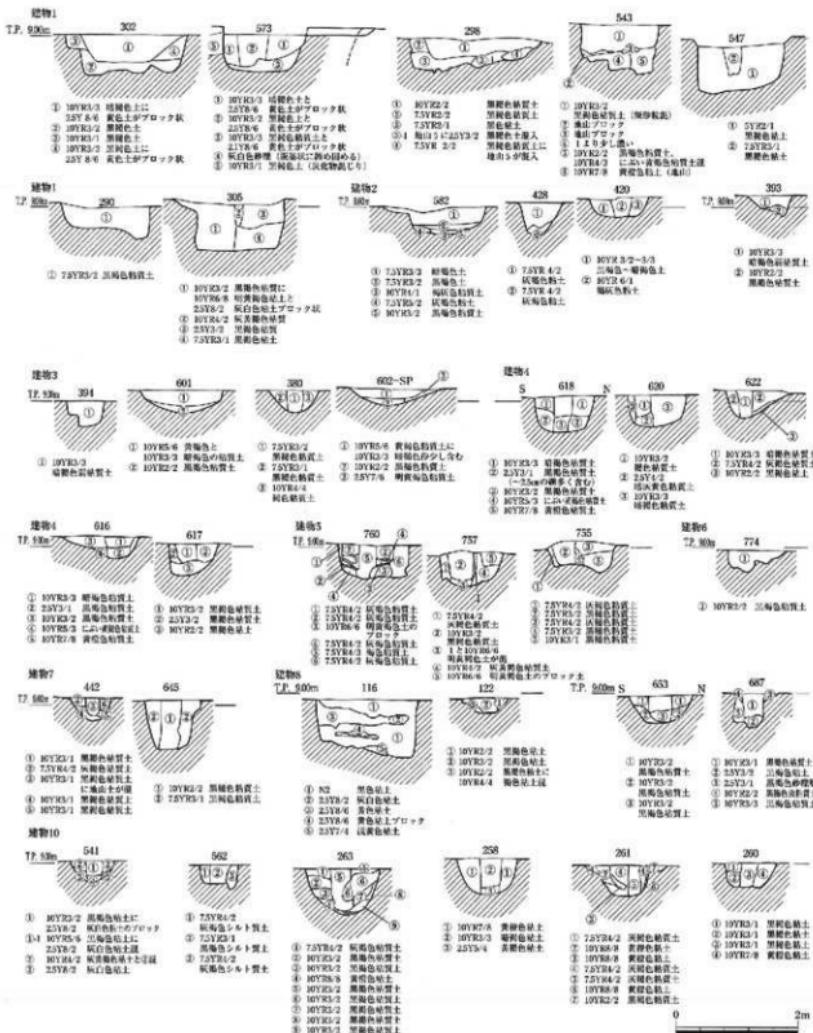
051・052-SK（付図）

堤体の北側、 $X = -156,680$ m、 $Y = -43,690$ m付近で検出した土器群である。包含層掘削中に、古墳時代から中世頃までの土器が比較的纏まって出土したため、遺構に伴うものと考えて遺構番号を与えた。今池から北に流れていた幅約2mの水路（053-S D）の両側で検出されたため、南西側を051-SK、東側を052-SKとした。遺物を取り上げながら掘り下げたところ、遺構としての掘形は確認されず、土器片が地山にくい込んだような状態であった。遺構面を数cm掘り下げるとな遺物は全く出土しなくなった。このことから、地山を掘り下げるこなく積み上げていたものが、土壤の堆積が進んで堆積層の中に取り込まれ、この地域が水田化された時に、除去されることなく残ったと考えられる。

近世の遺物が含まれないこと、瓦器は小破片ばかりで、図化できる物はなかったが、内外面の特徴から13世紀以降とみられる。おそらく今池の堤体築造のために集められた土砂の中に含まれ



第18図 建物10 平断面図



第19図 建物群柱穴土層断面図（実測分のみ掲載）

ていたものを纏め、そのまま山積みしていたのであろう。その後、この場所が水田開発された際に水路の畦の下に位置したため、土器が纏まった状態で残ったと考えられる。

054-SK（付図）

調査区中央西側、 $X = -156,660 \sim 156,670\text{m}$ 、 $Y = -43,710 \sim 43,720\text{m}$ の範囲の包含層に散乱していた土器群である。包含層の掘削中、この地区では他のブロックとは全く異なり、高密度で土器が出土したことから、遺構番号を与えて遺物を取り上げた。051・052-SKと同様に今池築造前後に纏めて山積みされていたものと考えられるが、土砂の堆積や、耕作地化された際に攪拌され、広範囲に拡散して残ったものと推測している。出土状況は051・052-SKのように地山にくい込むような状態のものは少なく、ほとんどは包含層内に含まれていた。

通常耕作地化されれば砾や土器などは耕作の邪魔になり、除去される。この地域は今池方向に緩く傾斜しているので、客土のうえ耕作地化されたのかもしれない。

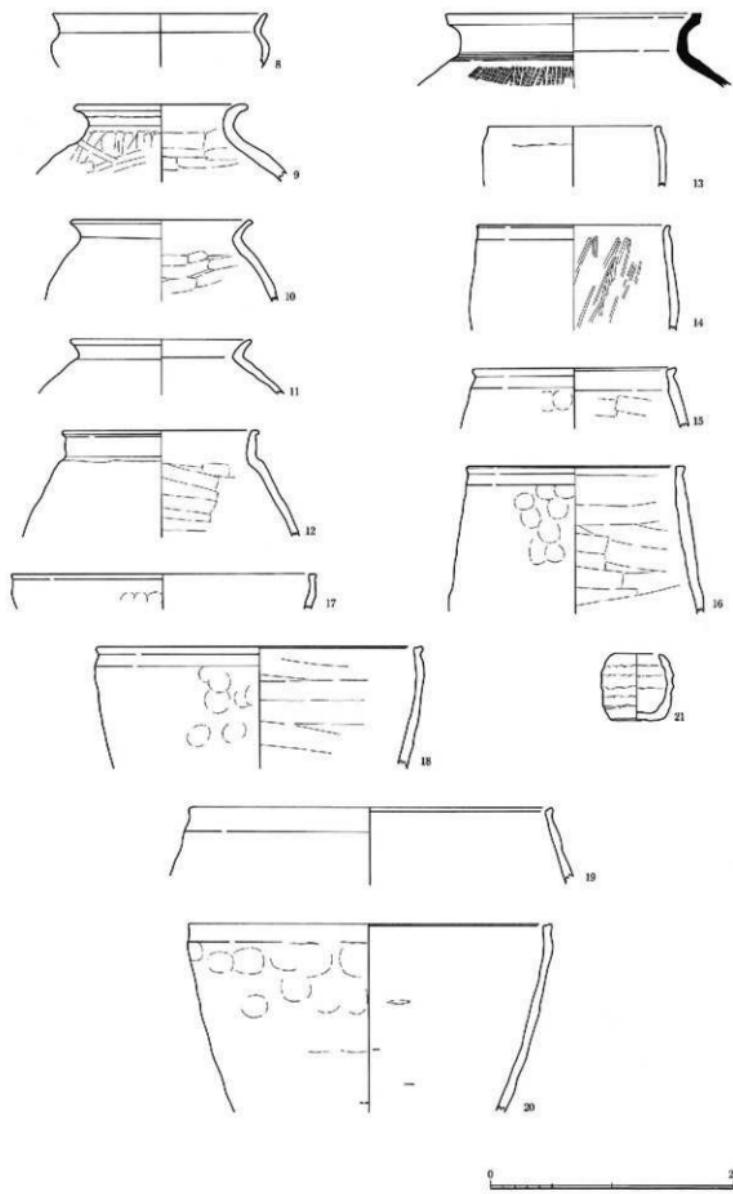
051・052-SK 出土土器（第20図）

051・052-SKからは、コンテナ5箱の土器が出土した。古墳時代から鎌倉時代頃までの土器片が混在している。泉州北地城では古墳時代以降、中近世の遺構でも完形に近い状態で、古墳時代から平安時代頃までの須恵器が出土するが、この遺構では須恵器は少なく、土師器の胴部破片が多くあった。実測が可能な口縁部破片をピックアップしたところ、同じような器種に偏ってしまった。

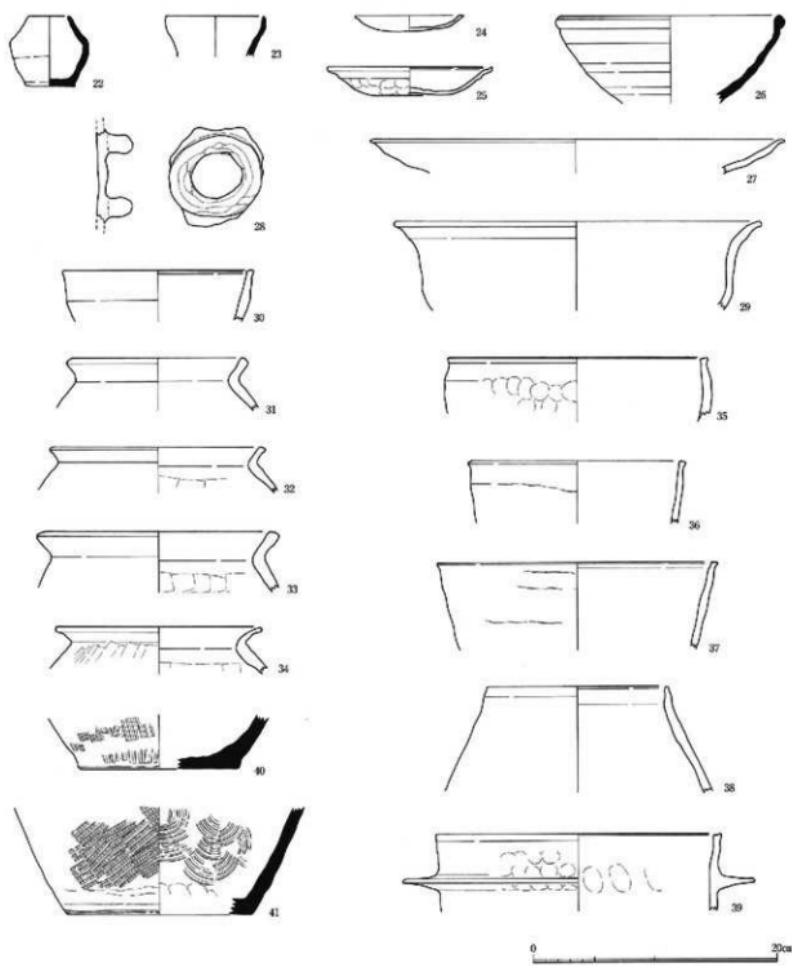
7は須恵器で、胴部に格子のタタキ目、頸部にカキ目が残る。口縁部は外反ぎみに立ち上がり、口縁端部は水平な面をつくる。8、9は壺の口縁部で、8は口径17.8cmを測る。9は頸部に接合痕が残り、胴部は板ナデで調整する。肩部に黒斑が薄く残る。口径13.8cm。10～12は壺で、11は大きく脛らむ胴部から短く外反する口縁部をつける。12は頸部に段をもち、口縁部はわずかに開いて立ち上がり、口縁端部に水平な面をつくる。胴部内面は板ナデで調整する。口径16cm。17～20は鉢や盤の口縁部である。器壁は摩滅の進んでいるものが多いが、器壁の調整をみると、外面はユビオサエで微かな凹凸を残し、口縁部は強いヨコナデで、口縁部に水平か僅かに内傾する面をつくる。内面は横位の板ナデで調整するものが多いが、14はヘラミガキで調整している。19は瓦質土器である。21は手づくね土器で、口径4cmを測る。

054 出土土器（第21図）

22は須恵器の無頸壺で、底部は糸切り底である。器高5.8cm、口径3.1cm。23は須恵器壺の口縁部で、口径7.9cmを測る。24、25は土師器の皿。25は「て」の字形の小皿で、底部外面に規則的なユビオサエが残る。26は内湾して立ち上がる東播系の鉢で、口縁部は丸く肥厚させる。口径18cm。27は浅皿状の杯部破片で、口径33.5cm。28はドーナツ形の把手である。29は鉢で、外湾して立ち上がる口縁端部に外傾する面をつくる。口径29.8cm。30は短く立ち上がる壺の口縁部。31～34は短く外反する口縁部破片である。胴部を板ナデで調整するものが多い。34は口径16.8cm。35～37は鉢か盤で、体部外面にユビオサエや粘土紐痕を残す。38は壺の口縁部で、口径14.8cmを測る。



第20図 051・052-S K出土土器実測図



第21図 054-S K 出土土器実測図

39は水平に延びる鋸をもつ羽釜で、口縁部はわずかに開いて立ち上がる。口径23.4cm。40、41は平底の須恵器底部で、底径15.2cm。

053-S D (付図)

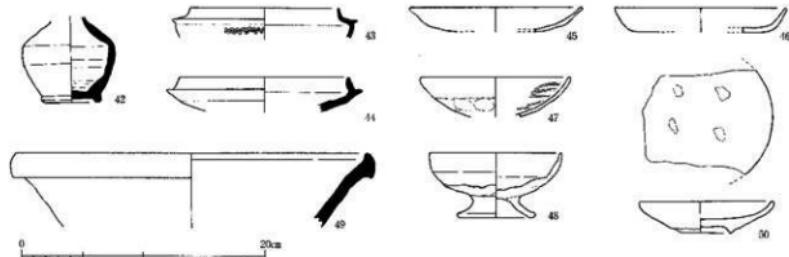
調査区の中央で確認した水路である。戦後米軍によって撮影された航空写真でも今池から北に延びる水路が観察される。調査時に上層は重機で掘削したので、下層が遺構として認識された。農業用水として度々浚渫されたと考えられるが、地山に近い⑧、⑩層では古墳時代から近世までの土器が含まれていた。法面の包含層から流出したり、投棄されたものが底面にまで沈降したものであろう。

出土土器（第22図）

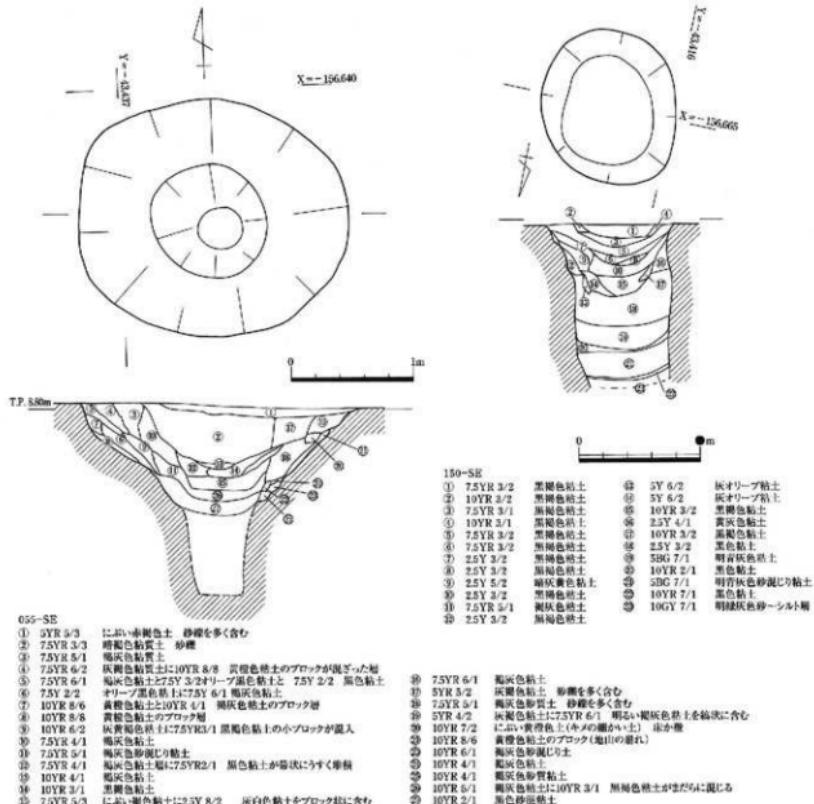
古墳時代から現代までの土器、陶磁器類が出土している。近世までの土器を取り上げた。42は瓶子形壺である。43、44は須恵器の杯で、43は身部に波状紋を付ける。45は瓦器皿、46は土師器皿。47は瓦器椀で、外面はユビオサエとヨコナデ、内面に粗い暗文が観察される。48は瓦器で高い高台を付ける。49は東播系の鉢、50は近世の陶器皿で、内面に4ヶ所の砂目が残る。

055-S E

黒高地部から3m東側の低地部で検出した素掘りの井戸である。平面形は方形に近い楕円形で、南北1.95m、東西2.2mを測る。堀片は擂鉢状を呈し、深さ0.9mを測る。底部の中心からやや北寄りで、地山の砂疊層を直径約0.5mの円錐台形に一段深く掘っており、最深部までの深さは0.6mを測る。検出面からの最深部までは1.5mを測る。埋土は主に暗褐色粘土、黒褐色粘土、褐灰色粘土で、古墳時代後期の井戸である。円錐台部の埋土は、地山の砂疊が混ざった黒褐色粘土上、中層は堀方に沿った凹レンズ状に褐灰色粘土や黄橙色土、上層は暗褐色粘土が厚く堆積している。



第22図 053-S K 出土土器実測図



第23図 055-S E (左)・150-S E (右) 平断面図

150-S E

調査区中央南東部のX = -156,665m、Y = -43,423.5m付近の粘土層上で検出した井戸である。平面形は方形に近い椭円形を呈し、長径1.3m、短径1.1mを測る。掘形を見ると、肩口は僅かに傾斜しているが、その下は垂直に近い掘削断面を示している。埋土は上層が主に黒褐色粘土で、壁面から地山の明黄褐色土の流出が観察される。中層は黒褐色から黒色粘土と青灰色粘土が凹レンズ状に厚く堆積する。地表面から1.1mより下層は緑灰色シルト～砂層が堆積し激しく湧水した。検出面から約1.2m下で古墳時代後期の土師器を検出したが、常時ポンプでの排水が必要なほど湧水と、壁面に亀裂が生じたため出土状況を図化することはできなかった。また底面の深さを確認できなかった。

207-S K (第24図)

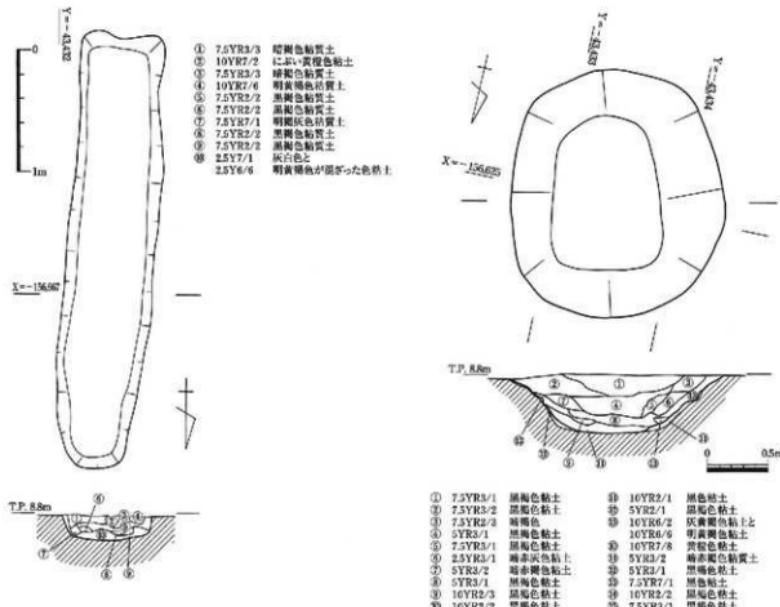
微高地南肩の188-S Dの南側で検出した長方形の土坑で、長径3.8m、短径0.75m、深さ0.2mを測る。掘形は肩口から垂直近くに掘られており、底面は掘削痕の凹凸が観察される。埋土は上層が暗褐色粘土や地山の黄橙色粘土、下層は黒褐色粘土と地表面が風化した灰白色粘土と明黄褐色粘土が底面に沿って薄く堆積していた。埋土から遺物は出土していない。異常に細くて長いが、土壙墓の可能性がある。

219-S K (第24図)

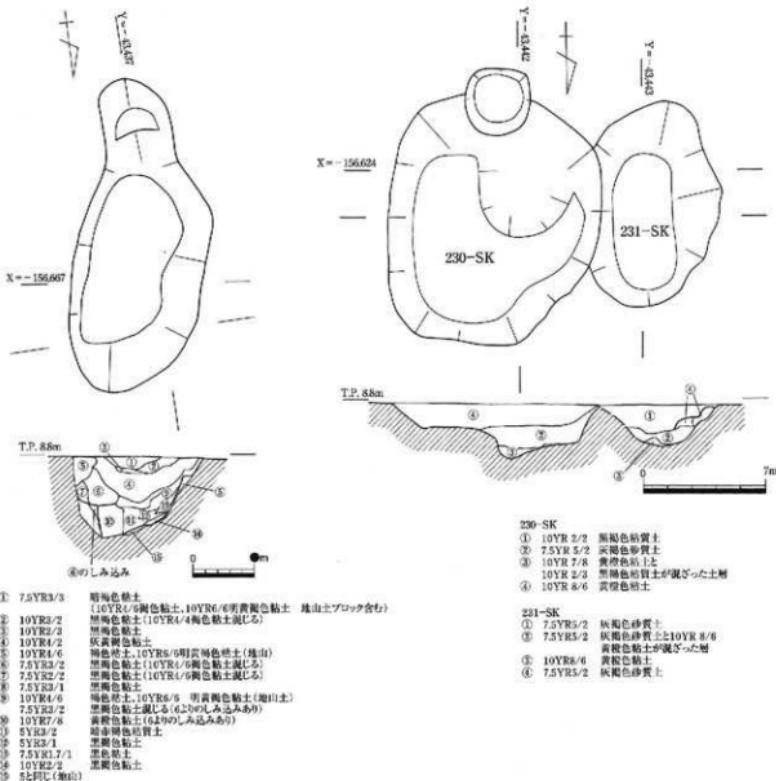
楕円形と方形を合わせたような形状の土坑である。規模は南北2.0m、東西1.82m、深さ0.45mを測り、底面は平らであった。埋土は地山の黄橙色土を含んだ黒褐色土や赤褐色土、暗褐色土、黒色粘土などで、下層は壁面に沿って堆積し、中上層は凹レンズ状に堆積し、地山の黄橙色粘土をブロック状に含んでいる。中下層に堆積する粘土の状態から貯水のための土坑と考えられる。遺物は黑色土器や土師器が出土しており、平安時代前期から中期頃のものである。

221-S K (第25図)

南北に長いいびつな楕円形の土坑で、長径2.6m、短径1.2m、深さ0.6mを測る。底部は北側に徐々に深くなっている、最深部で0.6mを測る。埋土は主に黒褐色土や暗褐色土で、地山の明黄褐色土（地山の黄橙色土がやや汚れた土層）がブロック状に堆積していた。



第24図 207-S K (左)・219-S K (右) 平断面図



第25図 221-S K (左)・230・231-S K (右) 平断面図

230-S K (第25図)

調査区北部で検出したいびつな円形に近い土坑である。東西1.7m、南北1.9m、深さ0.6mを測る。堀方の断面は逆台形の2段掘りで、最深部は土坑の南側にある。埋土は黒褐色土や灰黄褐色土、地山の黄橙色粘土が混ざった黒褐色土で、底面はやや広く、掘削時の凹凸が残る。

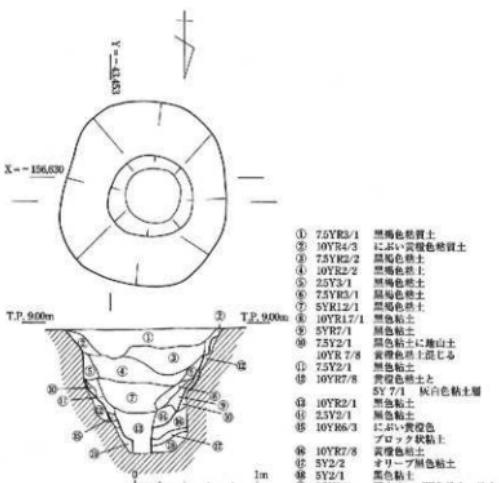
10世紀頃の黒色土器や土師器皿が出土している。

231-S K (第25図)

230-S Kの北側で検出した南北に長い土坑で、長径1.65m、短径約1.2m、深さは二段掘りになっており、0.6mを測る。埋土は灰黄褐色土に地山の黄橙色土がブロック状に混入した土砂が埋積していた。切り合ひ関係から230-S Kより古い遺構で、時期を特定できる遺物は出土しなかつたが、230-S Kと埋土が異ならないので、奈良時代から平安時代頃のものと考えている。

248-S E (第26図)

調査区北西部、建物10の北側で検出した井戸である。平面形は南北がわずかに長い楕円形を呈し、南北1.35m、東西1.25m、深さ1.05mを測る。断面形は非対称で、西側は底面から直立し、中段から傾斜をつける。東側は壁面が崩落したのか、屈曲した断面となっている。埋土は主に黒褐色粘土であるが、壁面に沿った凹レンズ状に堆積した黒色粘土や、黄橙色粘土を切って中央に黒褐色粘土が堆積しており、地山からの流出土で中層付

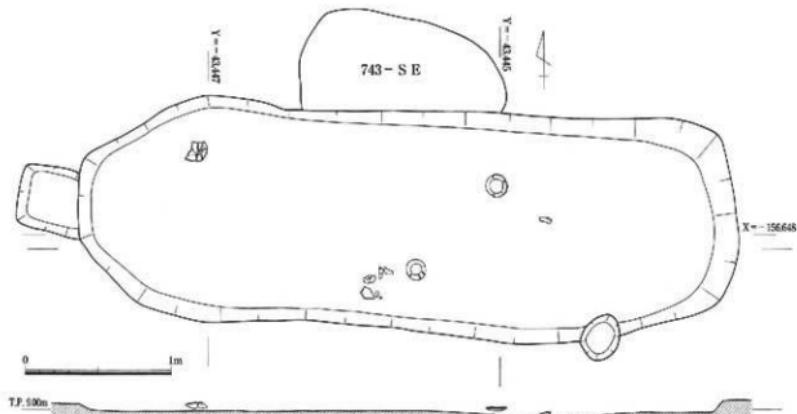


第26図 248-S E 平断面図

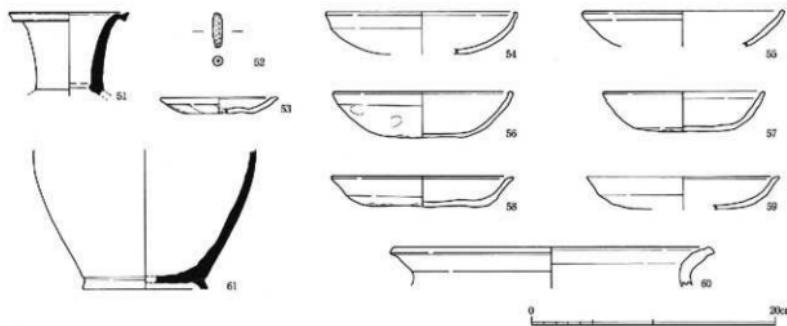
近まで埋積が進んだ頃に中央部を浚えたものと考えられる。層界は明瞭であったが、枠木は観察されず、素堀のままであったと考えられる。古墳時代の高杯が出土している。

446-S K (第27図)

X = -156,658m, Y = -43,445m付近で検出した東西に長いいびつな楕円形を呈する土坑で、北側は、古墳時代の井戸743-S Eと一部が重なっている。長径4.65m、短径1.65mを測る。底面は東にやや深くなるが、ほぼ平坦で、西側で5cm、東端近くで8cmの深さを測る。埋土は褐灰色



第27図 446-S K 平面図



第28図 446-S K 出土土器実測図

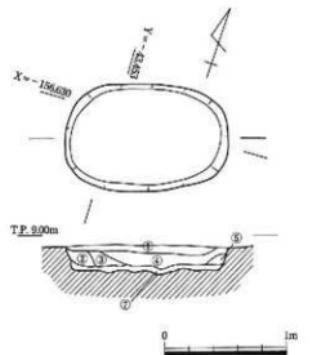
砂疊混じり土1層で、坑内から奈良～平安時代初め頃の土器が、分散して置かれたような状態で出土した。土坑の西側約2/3は掘立柱建物4に重なっている。土坑の底面は平坦であることから、建物4は土坑に掛けられた覆い屋で、土器以外は出土しなかったが、何らかの作業場的なものと考えられる。

出土土器（第28図）

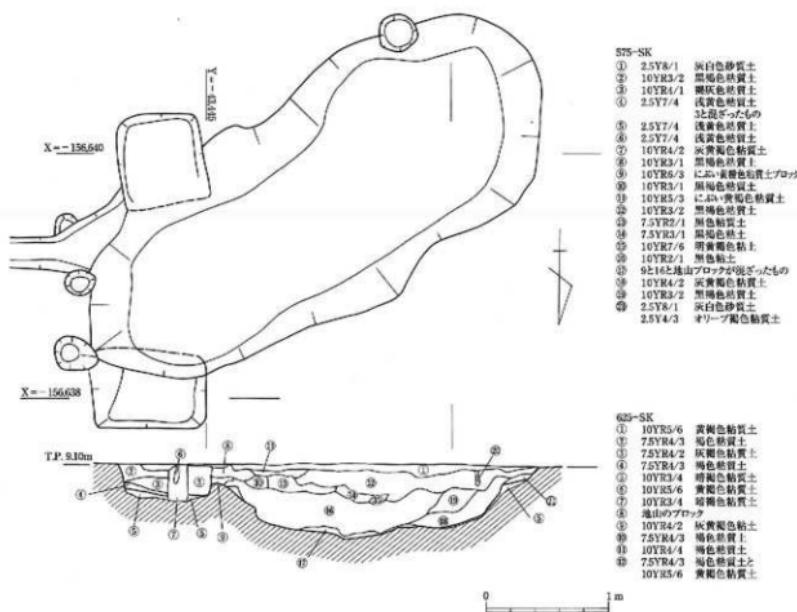
奈良時代から平安時代前期頃の土器が出土している。51は瓶子形の小型長頸壺の口頸部である。開き気味に立ち上がる頸部を外反させ、口縁端部を上下に拡張させ、ヨコナデして仕上げる。52は土鍾、長さ2.9cm、胸径8mmを測る。53は小皿で、口縁は水平な面をつくる。口径9.4cmを測る。54～59は土師器の杯である。54は内弯気味に立ち上がる口縁部を強くヨコナデし、端部は丸くおさめる。口径15.7cm、55は立ち上がりが直線的である。56、57は椀Cで、56は微妙にユビオサエが残る。58、59は外反気味に立ち上がる口縁部を持つ杯で口縁端部は水平に近い。60は壺の口縁部で、口径26cmを測る。61は須恵器壺の胴底部で、開いて踏ん張る高台をつける。

490-S K

188-S Dの南側で検出した比較的整った掘形を残す椭円形の土坑で、長径1.35m、短径0.9m、深さは0.25mを測る。埋土は主に褐色粘質土で地山の黄橙色土が小さいブロック状に混入している。埋土から平安時代の土器が出土しており、深さは浅いが、上層が堤体築造時に削平されたことも考えられるので、大きさから土壤墓の可能性がある。



第29図 490-S K 平断面図

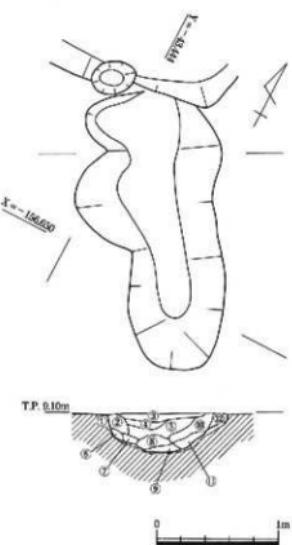


575-S K

建物 1 付近で検出したいびつな梢円形を呈する土坑である。長辺 4.3m、短辺 1.8m、深さ 0.6m を測り、堀方は船底形を呈する。最上層に 5 ~ 6 cm の厚さで固く締まった灰白色土が堆積しており整地土と考えられる。この下は、黒褐色粘質土や地山の黄褐色土をブロック状に含む黒褐色粘土、黒色粘土となっている。大きな土坑であるが出土遺物が少なく、掘削時期は不明であるが、最上層の灰白色土が建物 1 に伴うと見られるので、掘削時期は奈良時代以前と考えられる。

625-S K

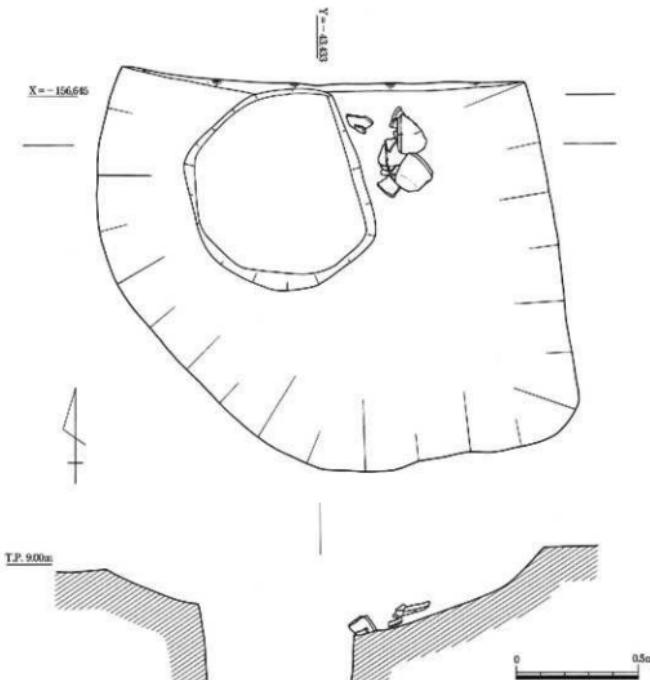
446-S K の南部で検出したいびつな梢円形を呈する土坑で、長辺 2.3m、短辺 1.15m、深さ 0.3m を測る。埋土は灰褐色土で時期のわかる遺物は出土しなかった。



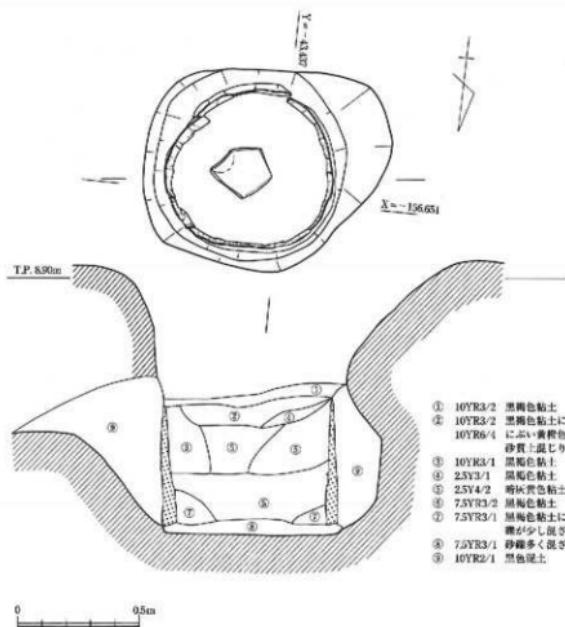
第31図 625-S K 平断面図

630-S E

北調査区中央、664-S Kの北端で検出した丸太を割り貫いて井戸側とする井戸である。円形に掘られたと考えられるが、西北肩が崩れて拡大し、方形を呈している。東側は円形の輪郭を残している。検出長は東西、南北とも約1.9mを測る。堀方を東、南側でみると、上肩部から約0.4mまでは緩やかに傾斜し、その内側は巾着状に膨れた形状を呈し、底までの深さ1.2mを測る。埋土は作図前に崩壊したため、上層から底面までを図化することはできなかったが、主に黒褐色砂質土である。枠木の内部は主に黒褐色粘土が堆積していたが、含水率や粘土の質感、色調に差が観察される。井戸側は丸太を割り貫いたもので、出土時の枠木は直径72cm、残存高は54cm、残存最大厚8cmを測る。検出時は井戸側に隙間が観察されない程に密着していたが、洗浄したところ、幅約15cmと20cmの板材があり、割り抜いた際に割れたものと考えられる。井戸側として据えられた際には部材は密着しており、隙間が開かないように縛っていたことも考えられるが、その痕跡は観察されなかった。また、下部に2カ所、5cm×3cm方形に枘穴が開けられている。枘穴は井戸側として利用される前の、材木としての輸送時にあけられたものと考えられる。この井戸枠の



第32図 630-S E 上層 土器出土状態実測図



第33図 630-S E 平断面図・井戸側実測図 (S=1/8)

る。64は片口鉢で平らな底部から開いて立ち上がる体部をわずかに内傾させて口縁部を造る。井戸上面で検出した。65は杯で口縁端部はわずかに外反させておさめる。66は土師器の椀か。67は甕の口頭部。68は黒色土器で、外面はユビオサエが観察される。69は緑釉碗の底部で、内外間に薄く施釉が残る。70は須恵器、平底の底部で、はみ出した粘土をヘラケズリで器壁を整えている。器壁はタクキ調整が丁寧である。

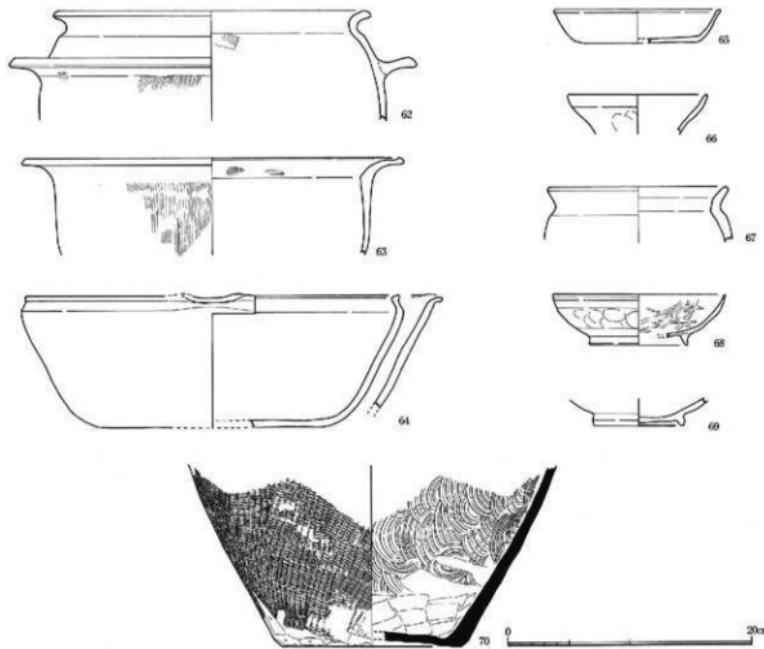
外側は壁面が大きく崩れたとみられ、袋状に広がっており、出土状態図を掲載することはできなかったが、壁面近くから薄い板材が2枚出土している。壁面の崩落状況から、この井戸は素掘りであったものの、壁面が崩れたため削り抜いた丸太の井戸側を据えたと考えられる。

井戸側内から須恵器の底部が、また最上層では土師器の片口鉢(第34図-64)が出土している。

特に片口鉢は、出土状態から井戸廃棄時の祭祀に使用されたものと考えられる。

出土土器 (第34図)

62は土師器羽釜、内湾する体部から短く外反する口縁部を造る。63は甕で口縁部を水平近くまで外反させ、端部をわずかに肥厚させ



第34図 630-S E 出土土器側実測図

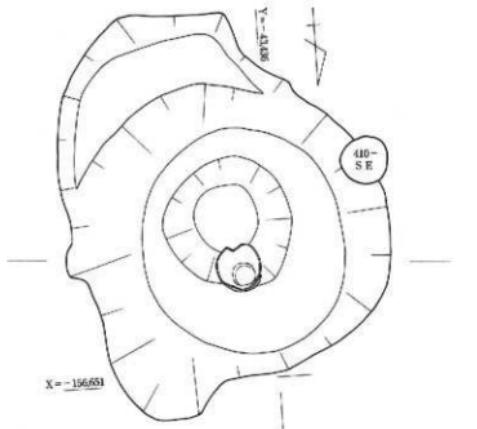
635-S E

$X = -156.630m$, $Y = -43.436m$ 付近の、遺構が集中する微高地の傾斜部で検出した井戸である。平面形は南に膨らんだいびつな楕円形を呈し、長径2.15m、短径1.65m、深さ0.95mを測る。堀方は上面から0.1mほど下がった位置から約0.7mまでがほぼ垂直に掘られ、底面は中央が浅く窪んだ形状をしている。砂礫層には達していないが、埋土黒褐色粘質土や灰褐色の粘質土～粘土で、壁面に近いところは地山から流出した黄褐色土が混ざっている。埋土は下層が壁面に沿って堆積し、中層以上は中央部に傾斜して約10cmの厚さで規則的に分層される。湧水層の砂礫層には達していないが井戸と考えられる。

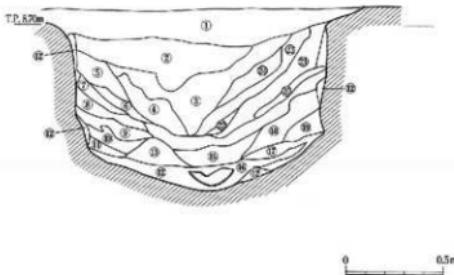
底面から古墳時代後期頃の底部を打ち欠いた土師器の甕が出土している。

662-S P

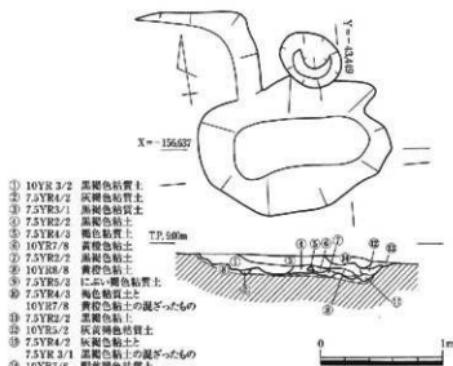
630-S E の西4m ($X = -156.652m$, $Y = -43.439m$) で検出した、丸みを持った方形のピットで、大きさは $0.6m \times 0.55m$ 、深さ0.2mを測る。埋土から黑色土器碗が出土している。



- ① 7SYR4/2 黄褐色粘質土(地山)ブロック少し混ざる
- ② 7SYR3/1 黑褐色粘質土
- ③ 10YR2/3 黑褐色粘質土
- ④ 10YR2/3 黑褐色粘質土
- ⑤ 7SYR3/3 黑褐色粘質土
- ⑥ 10YR2/3 黑褐色粘質土
- ⑦ 7SYR7/2 明褐色砂質土
- ⑧ 7SYR5/2 黄褐色砂質土
- ⑨ 5YR2/2 黑褐色砂質土
- ⑩ 10YR8/8 黄褐色粘質土ブロック
- ⑪ 5YR4/2 黄褐色粘質土上に
- ⑫ 5YR2/1 黑褐色粘土混
- ⑬ 10YR8/8 黄褐色粘質土=地山
- ⑭ 5YR3/2 黑褐色粘土
- ⑮ 7SYR3/2 黑褐色粘土
- ⑯ 10YR2/3 黑褐色粘土
- ⑰ 5Y6/1 灰色粘土と
- ⑱ 10YR2/1 黑色粘土混ざる
- ⑲ 10YR8/8 黄褐色粘質土ブロック
- ⑳ 10YR2/2 黑褐色粘土に
- ㉑ 10YR4/3 にいわ黄褐色粘土混
- ㉒ 10YR2/1 黑褐色粘土
- ㉓ 10YR2/2 黑褐色粘土に
- ㉔ 10YR4/3 にいわ黄褐色粘土混
- ㉕ 10YR2/2 黑褐色粘土
- ㉖ 7SYR4/1 混褐色粘質土
- ㉗ 7SYR4/1 混褐色粘質土(地山)ブロック
- ㉘ 7SYR4/1 混褐色粘質土
- ㉙ 10YR8/8 地山



第35図 635-S E K 平断面図



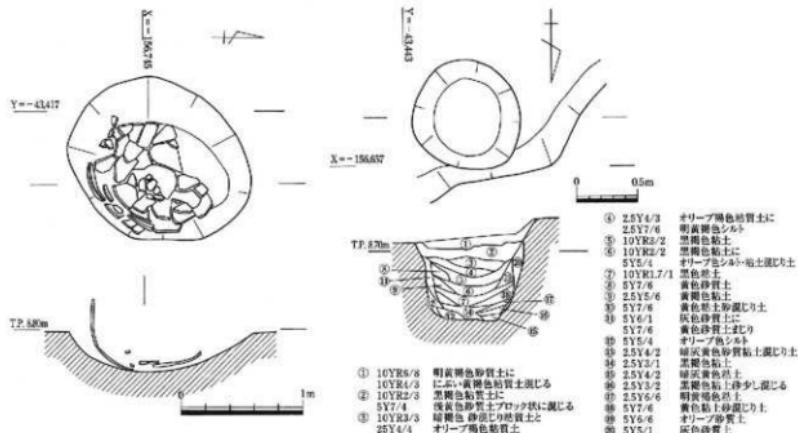
第36図 698-S K 平断面図

698-S K

微高地の東部、X = - 156,637m、Y = - 43,438m付近で検出した東西に長い梢円形を呈する土坑で、深さ0.25mを測る。埋土は主に地山の黄褐色土が混ざった黒褐色粘質土や褐色粘土で、遺物は出土していない。

705-S P

北調査区の南東部、X = - 156,674m、Y = - 43,417m付近で検出した地山の黄褐色粘土を浅く掘り、土師器を据えたピットである。ピットの形状は梢円形を呈し、長径0.38m、短辺0.32m、深さ約8cmを測る。据えられていた土師器は壊れ、底部を斜めにして置かれ、口肩部の一部は碎けて内部に落ち込んでいた。地山まで包含層を掘り下げる段階では上半分は露



第37図 705-SP (左)・725-S E (右) 平断面図

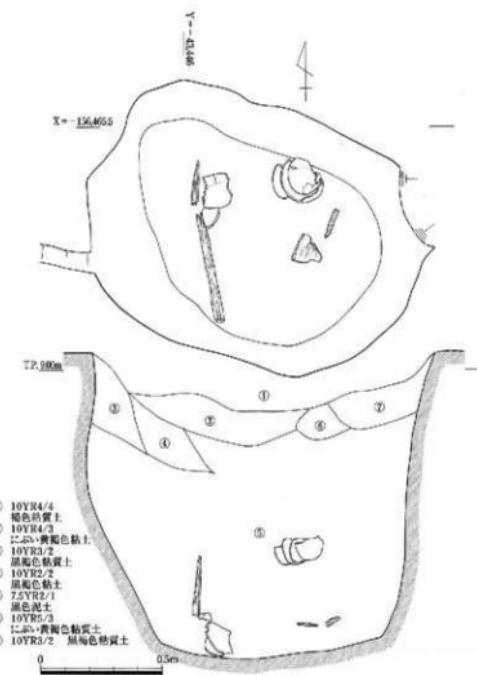
出していた。体部の摩耗が進んでいないので、包含層の上面から掘り込まれた遺構と考えられる。

725-S E

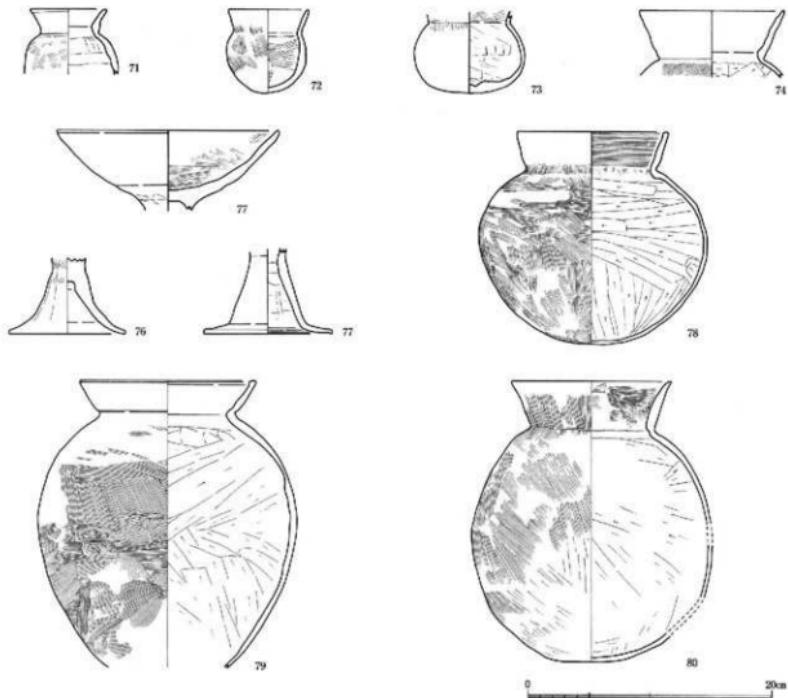
188-S Dの北側、X = -156.657m、Y = -43.444mで検出した素堀の井戸である。平面形はいびつな楕円形を呈し、東西1.2m、南北1.1mを測る。埋土は、壁面に沿って地山からの流出土、その内側は黒色粘土や黒褐色粘質土、オリーブ褐色粘質土で、凹レンズ状に堆積していた。堆積層に明確な層界が観察されるので、幾度かは浚渫されたと考えられる。時期の分かる遺物は出土していない。

743-S E

南側半分が作業場と考えられる土坑446-S Kと重なる素掘り井戸である。446-S Kに上層南側が削平されているが、東西1.45m、南北1.05mの



第38図 743-S E 平断面図



第39図 743—S E 出土土器実測図

歪な橢円形を呈する。硬い褐灰色砂礫混じり土を垂直近く掘り込んだと考えられるが、検出時は壁面が崩落し、巾着状になっていた。深さは1.2mを測った。埋土は下層断面を作成する前に崩壊し、上層しか記録できていないが、主に黒褐色泥土で、地山の黄橙色土や黄褐色土がレンズ状に堆積していた。⑤の黒色泥土は0.4m以上堆積しており、下層は黒色泥土が厚く堆積していたと推定される。底面からやや浮いたところで、古墳時代前期から中期頃の土師器や先端を尖らせたと見られる角材が出土している。

出土土器（第39図）

71～74は小型丸底壺。71は口縁径が胴径より小さい。外面はハケメ、内面はナデとユビオサエが残る。72は頸部のシボリが小さく、口縁径と胴径はほぼ同じである。外面は細かいハケメ、内面は粗いハケメが残る。73は底部が広く扁平な体部を持つ。内面は板ナデで調整する。74は口頸部の破片である。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整している。75～77は高杯、75はわずかに内湾ぎみに立ち上がる杯部で内面は板ナデで調整している。76、77は高杯脚部、76は外弯

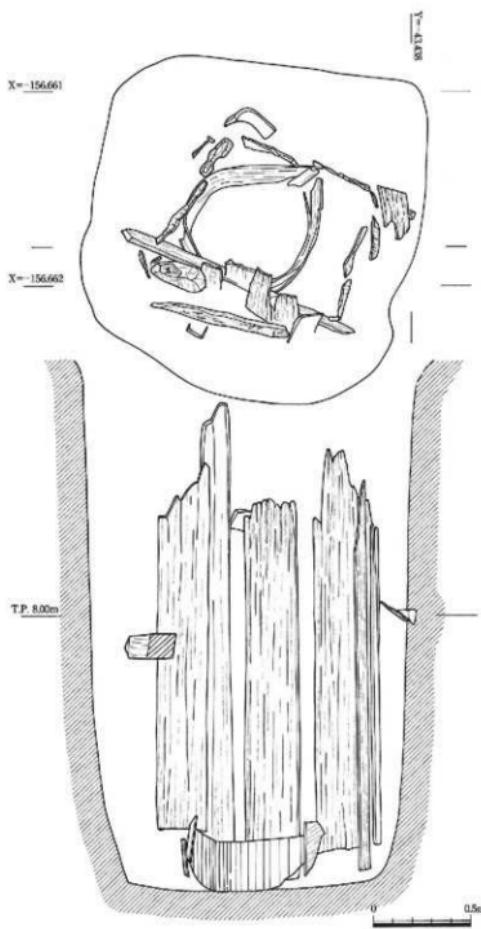
して開くもの、77は脚部下端が屈曲して開く。78は壺である。球形の胴部に短く開き気味に立ち上がる口縁部をつける。頸部は強くナデて屈曲する。内面はヘラケズリ、外面はハケメで調整する。79、80は壺である。79は胴長の体部から内弯気味に立ち上がる口縁端部を肥厚させる。80は球形に近い胴部から外反して立ち上がる口縁の端部を尖らせぎみに摘んでヨコナデして仕上げている。

745-S E

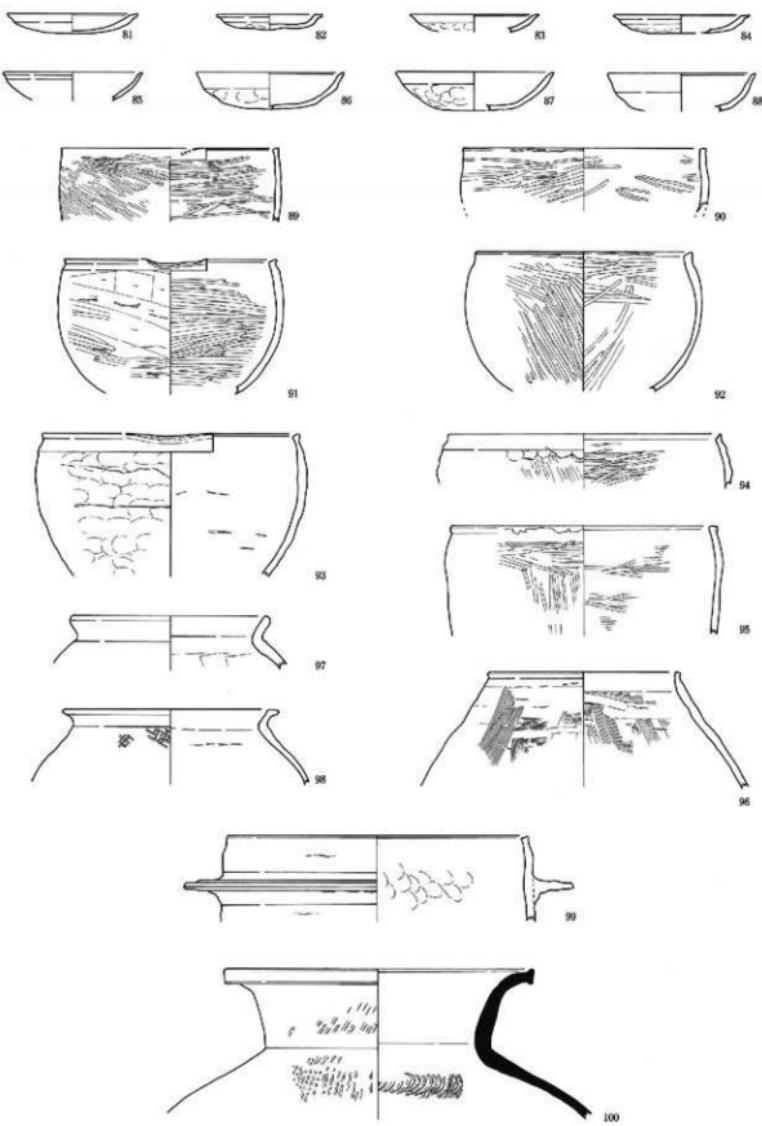
古墳時代後期の溝、188-S

Dの埋没後、平安時代になつて掘られた井戸である。188-S D埋積土の黒褐色粘土掘削中に井戸側材が露出し、精査して井戸の輪郭を確認した。東接する746-S E埋没後に掘られた井戸で、平面形は円形に近い隅丸方形を示し、長径約0.9mを測る。掘形断面は垂直に近い。井戸側は長さ1.5m、幅15~25cm、厚さ1~10cm前後の板材を並べて方形に組んだもので、東西の長辺約50cm、短辺約40cmを測る。板材は先端が痩せて薄くなっているが、底では3~5cmの厚さを測る。井側は井戸掘形の南東部寄りに組まれ、軸は約30°東に振っている。

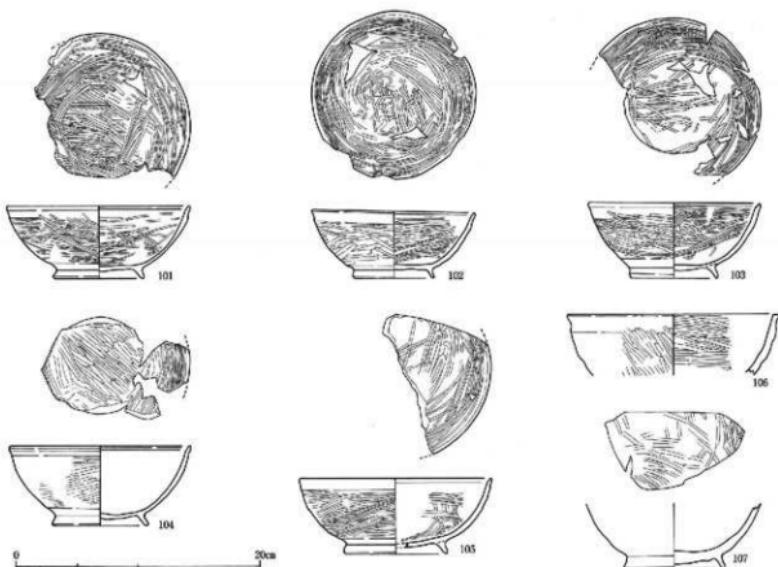
188-S Dの影響で土壤が崩れやすかったのか、溝の中心部に近い南西辺に側板を多く使用し、内側には最大径約5cmの角材を刪縁材として補強していた。隙間の空いたところは2枚重ねとしているところもある。井戸底には直径約



第40図 745-S E 平断面図



第41図 745-S E 出出土器実測図-1



第42図 745-S E 出土土器実測図—2

35cm、高さ15cmの大きさの曲物を据え、内部に黒色土器碗を入れて、水を汲み上げたときのヘドロ除けとしていた。土器は細かく砕けていたが、完形に復元できるものが多かったので、釣瓶等の衝撃によって砕けたと思われる。曲物は南東隅の井戸側板が上に乗り、曲物を少し破損していたので、曲物を据えた後に側板を立てたと考えられる。曲物は現地で取り上げた際に分解し、復元することはできなかった。

井戸の埋土は主に黒褐色から黒色の泥質土で、188-S D埋土と近似している。

曲物内から出土した碗以外に、上層から多くの土師器、須恵器が出土している。廃棄時に何らかの祭祀を行なったと考えられる。

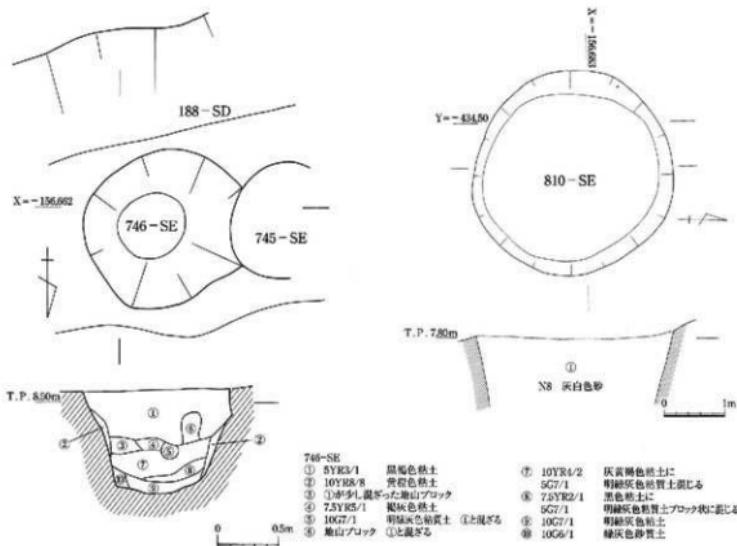
出土土器（第41・42図）

平安時代前期の遺物が多く出土している。81～84は小皿で、口縁端部を引き出して仕上げている。外底面にユビオサエが残り、体部はナデで調整する。85～88は杯。口縁部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部をそのまま丸くおさめるものとるもの（85、87）とヨコナデして外反させるもの（86、88）がある。鉢（89～95）の破片が多く出土しており、土器溜まり（051、052、054-S K）と似た傾向を示している。89、91、93は片口の鉢、90は黒色土器で、他は土師器である。89は体部が直立し、口縁端部に内傾する面をつける。90～94はわずかに脹らむ体部をもつ。90の口縁端

部は水平な面、他は内傾する面を持つ。片口の91、93は口縁部を丁寧にヨコナデ調整している。調整は内外面とも密なヘラミガキで仕上げているが、93はユビオサエや粘土の継ぎ目が残る。口径は17~23cmの範囲内にある。95は口縁部がわずかに内湾するので、甌かもしれない。96は甌の口縁部で内外面とも細かいハケメで調整する。97、98は甌の口縁部である。99は羽釜で、わずかに内傾して立ち上がる口縁部と水平に伸びる鉢をつける。100は須恵器の甌で、外反して水平近くまで開いた口縁端部を上下に拡張させる。101~107は黒色土器椀で、殆ど曲物内から出土したもの。10個体以上あるが、接合、実測できたのは7個体であった。口縁端部は内面に沈線状の段を付けるものと、水平な面を持つもの（106）がある。体部は内外面ともに密なヘラミガキで調整している。高台は椀の周縁部に短く「ハ」の字形に踏ん張るものを作る。高台高は7~9mmを測る。

746-S E

745-S Eの東側で検出した素彫の井戸である。西側肩部は745-S Eに切られている。平面形はいびつな隅丸方形で、東西1.3m以上、南北1.3m、深さ0.85mを測る。下層の埋土は地山の黄橙色土が酸化、変色した緑灰色粘質土～砂質土、上層は地山の黄橙色土を粒状に含む黒褐色土である。須恵器や土師器の小片が出土したが、実測できるものはなかった。745-S Eとの前後関係から奈良時代頃に穿鑿され、短時間のうちに土砂が流入し、放棄されたと考えられる。



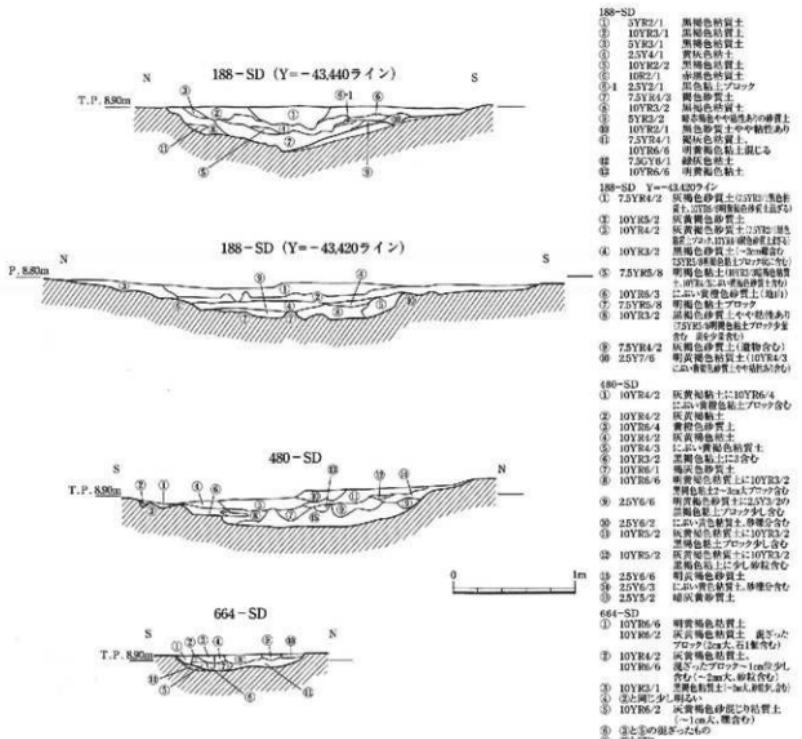
第43図 746-S E (左)・810-S E (右) 平断面図

調査区南西端の堤体下層で検出した大きな井戸である。810-S Eの平面形は東西方向が僅かに大きい楕円形を呈し、南北3.2m、東西3.4mを測る。811-S Eは南北が大きい楕円形で、東西3.1m、南北3.4mを測る。埋土はともに灰白色砂層で、約0.5mの深さまで掘り下げたが湧水が激しく、掘削を断念した。堤体築造以前に使用されていた井戸と考えられる。

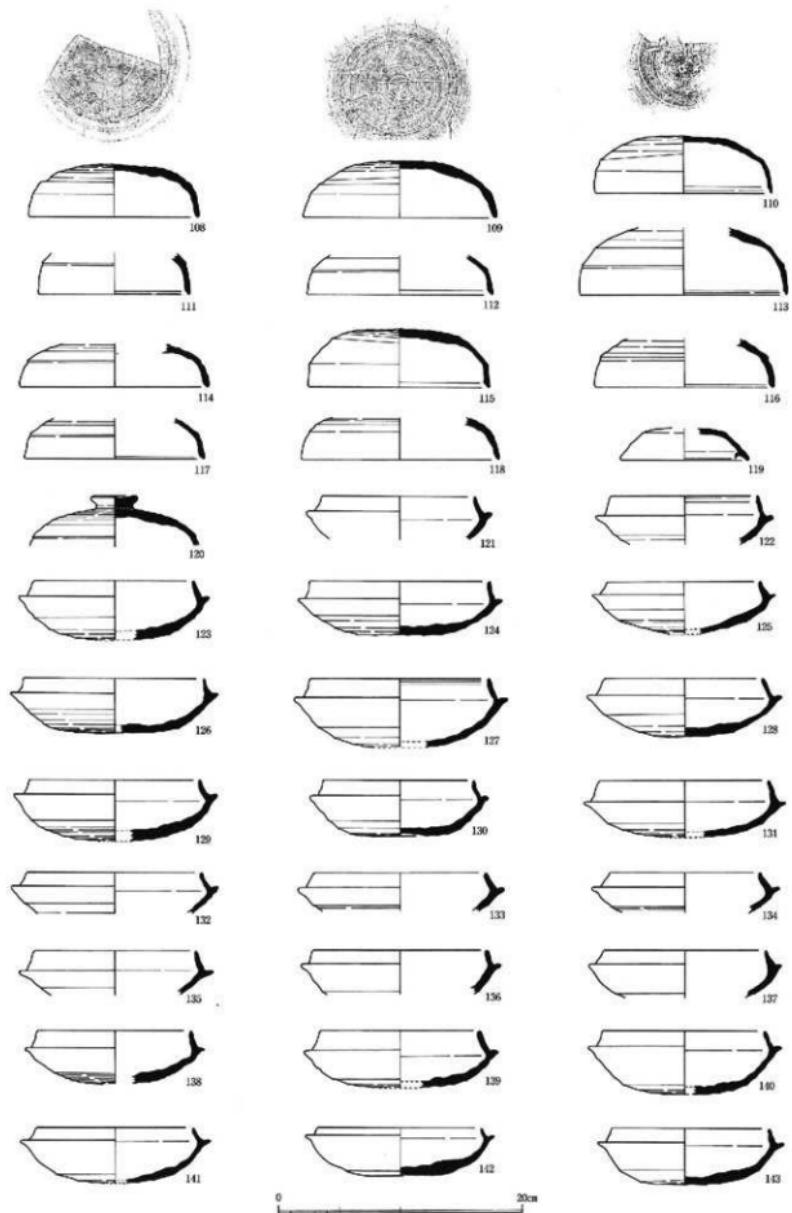
溝

188-S D

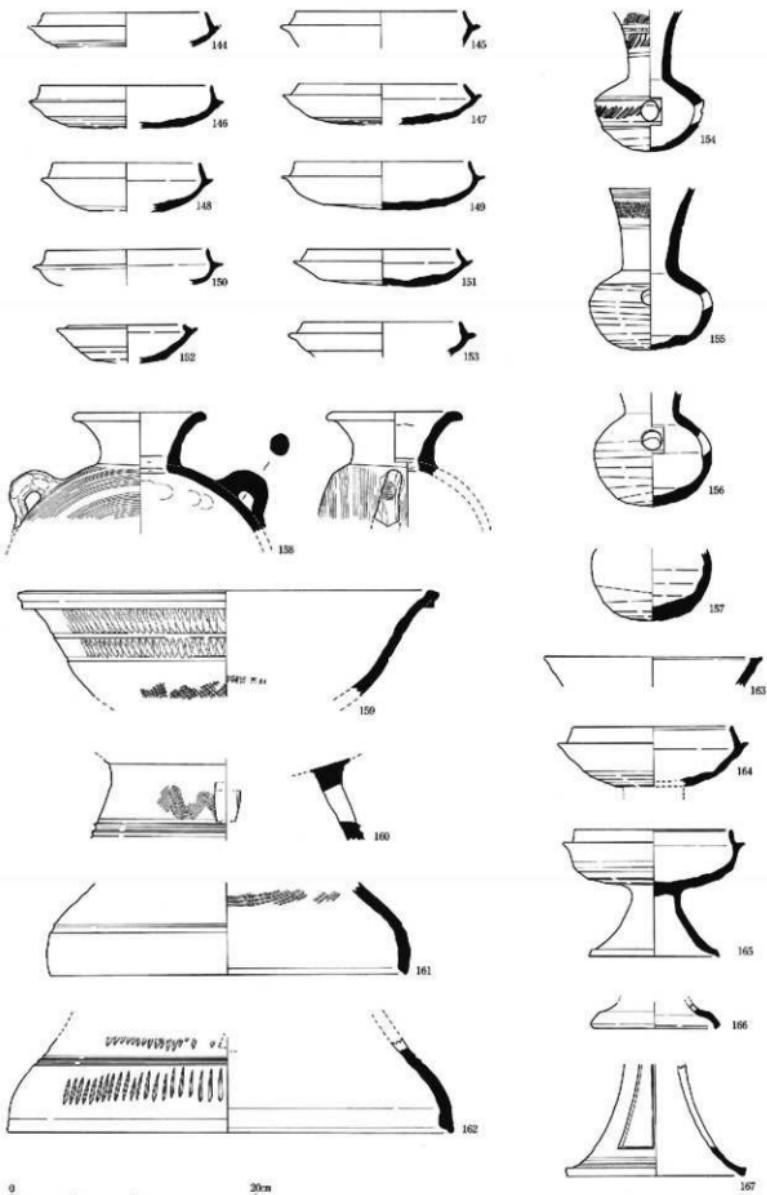
北調査区のほぼ中央で検出した西南西から東北東に流れる溝で、「概要V」で報告されているS D28に対応する。微高地の南端に沿って掘られており、掘形はなだらかな「U」字形を呈するが、北肩がやや鋭角的である。幅は西側で2m~3.5mで、肩部の形状は地山が砂質土である北肩では検出時から緩やかな波状曲線を描いており、流水や降雨により肩部の土が流出したことが伺われ、長期間に渡って利用されていたと考えられる。深さは0.4m前後を測るが、調査区中央の



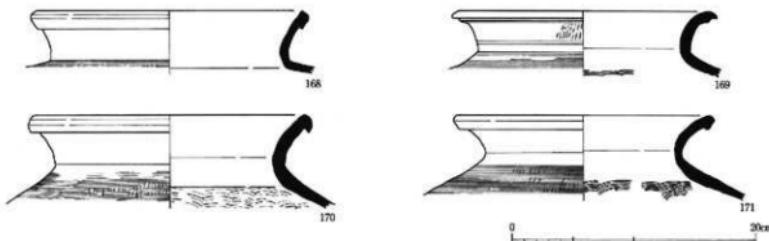
第44図 188-S D・480-S D・664-S D 平断面図



第45図 188-S D出土土器実測図-1



第46図 188—S D出土土器実測図一2



第47図 188—SD出土土器実測図—3

微高地南東端付近から、鳥跂状に分かれて広がり、黒褐色砂混じり粘土や灰褐色砂混じり粘土の浅い堆積層となって消滅する。埋土は上層が黒褐色粘土、中下層が黄灰色粘土や褐色粘質砂砂礫を含む黒褐色粘土で、古墳時代後期の須恵器が大量に出土している。

前回の「V」では上層に堆積する灰褐色粘土から平安時代前期の土器が多量に出土しているが、今回の調査では、この時期の土器を、溝の南側で検出した土器集積遺構（054—SK）の広がりとして取り扱かっている。また、溝に重複する745—S E付近でもこの時期の土器が集中していたことからこの井戸出土土器として扱かっている。

出土土器（第45～47図）

古墳時代後期の土器がコンテナ5箱出土した。井戸では甕や高壺などの土師器が主に出土しているが、この溝から出土した土器は須恵器がほとんどで土師器は少ない。器形を復元できるものは蓋杯が多く、掲載する土器は偏った構成となってしまったが、甕や壺、高壺、器台の破片も多く出土している。

108～120は蓋。108～110、115～118は丸みを持った天井部から口縁部に滑らかに移行するもの。天井部と口縁部の境の稜は曖昧で、ヨコナデでかすかな凹みをつけて稜と分かる程度のものである。111は天井と口縁部の境の稜が明確なもの口径12.5cmを測る。112～114口縁部との境に浅い沈線を巡らせ段をつけて稜を作り出している。115は口径17cmを測る。口縁端部は丸く仕上げるものと、摘んで段をつけて仕上げるもの（110、111、115、117）がある。天井部外面の回転ヘラケズリは全体の1/2以下のものが多い。119は内側に短いかえりがつくもの。上層に混入したものであろう。つまみのつく蓋（120）は出土量が少ない。

121～153は杯身である。底部は丸みをもつものと、わずかに平らなもの（124、126、130、139、142、39～151等）がある。口縁部は内傾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめるものが多い。122は口縁端部に内傾する面を持つ。127は口縁端部内面に段をつける。130は口縁部が外反ぎみに立ち上がる。144～151は底体部が低く平らなもので、口縁部の立ち上がりは短く、内傾するものと外反気味に作るもの（150）がある。

外面の回転ヘラケズリは全体の1/2以下のものが多く、1/3程度のもの（138～143）もある。45は小さく平らな底部から開いて立ち上がる体部を持つ、立ち上がりは短く内傾する。

154～157は(ハソウ)。154は扁平に近い肩部から、外反して立ち上がる頸部をつける。体部と頸部に、沈線と刺突文の模様帯がある。体部外面は回転ヘラケズリで仕上げている。155は頸部に沈線と刺突文の模様帯を持つが、体部は球形で無紋である。158は提瓶で、円形の体部に短く外反する口縁端部をわずかに外傾する面をつける。体部はカキ目で仕上げ、丁寧に面取りした半円形の把手をつける。159～162は器台である。159は内湾気味に立ち上がる口縁端部を肥厚させ外傾する面をつける。外面は沈線で区画し、波状文を巡らせる。体部下半には細かい格子状のタタキメが残る。159は口径33cm。160は脚部で、波状文と沈線を巡らせ、長方形の透し穴をあける。161、162は脚裾部で内弯して垂下し、161の端部は内傾する面をつける。162は脚端部をわずかに肥厚させ揃んで丸く仕上げている。163は鉢の口縁部。164～167は高杯。164、165は内傾して立ち上がる口縁部を持つもので、164は端部を内傾させて面をつけ、165は端部を丸くおさめている。165は脚部に透かしをあけないもので、外反気味に開く脚端部に外傾する面をつける。166は屈曲する脚端部、167は長脚の裾部で、端部をわずかに肥厚させ、垂下する面をつける。

168～171は甕の口縁部である。168は開いて立ち上がる口縁の端部を方形に肥厚させる。169は外反して立ち上がる口縁を肥厚させ、口縁端部を丸く外傾させるもの。170は口縁端部を曲げて垂下させるもの。171は外反する口縁端部を折り曲げて肥厚させるものである。体頸部にはタタキ目のちカキメで仕上げている。

706・709-S D (付図)

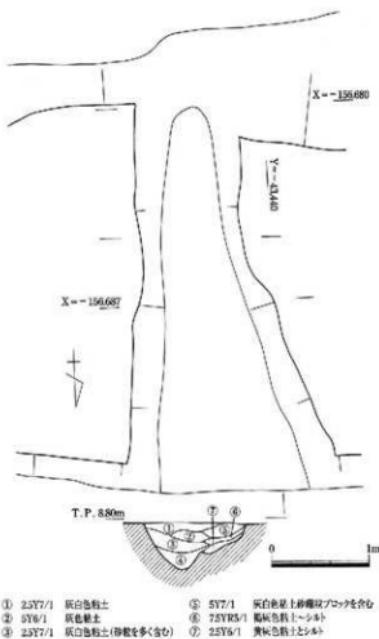
北側堤体に平行する溝で、幅1.2～1.5m、深さ0.2～0.45mを測る。埋土は灰白色シルトや灰白色粘土で、遺物は出土していない。埋土から近世頃の今池からの用水路と考えられる。

735-S D

堤体下層で掘られたハガネ土(503-S D)と堤体に沿って掘られた溝706・709-S Dにつながる溝である。幅は堤体側で1.1m、北の706-S D側で2.1m、深さ0.45mを測る。溝の東側に最深部があり、西側は2段掘りとなっている。埋土は灰白色粘土や褐灰色粘土で、遺物は板の端切れ材が出土している。埋土から706-S Dと同時期の溝で、053-S D以前の今池からの用水路と考えられる。

314-S D

遺構が集中する微高地の東側上肩部に沿っ



第48図 735-S D 平断面図

て掘られた小溝で、幅0.25~0.45m、深さ0.4mを測る。北側は635-S Eの南西側で、南側は東西小溝481-S Dの北側で切れており、全長は約26mを測る。埋土は褐灰色砂質土で時期を示す土器は出土していない。

480-S D

微高地の南部で検出した溝状の遺構である。幅2.4m、深さ0.3mを測る。微高地内の約13mの範囲で収まっている。埋土は灰黄褐色粘土や褐灰色砂質土、明黄褐色砂質土で、地山を浅く掘り下げて搅拌したような遺構である。

481-S D

188-S Dの北側約2mで検出した、微高地南上肩部に沿って掘られた小溝である。幅0.3~0.5m、深さ0.1m前後を測る。埋土は褐灰色土で、遺物は出土していない。

664-S D

480-S Dの北側で検出した溝状の遺構である。630-S Dの南側から西に掘られ、約10m程で浅くなっている。埋土は砂礫を含む明黄褐色や灰黄褐色粘質土、黒褐色粘質土がブロック状に観察される。井戸（630-S E）の水を処理するための溝と考えられる。

各遺構出土の土器（第49・50図）

150-S E (172) 172は古墳時代後期の壺、球形の体部から開いて立ち上がる口縁を作る。頸部を強くヨコナデして括れを作る。体部外面は細かいハケメ、口縁部にも縦方向のハケメが薄く残る。内面はヘラケズリで薄く仕上げ、頸部に指オサエが残る。

193-S K (173~175) 173~175は須恵器。173は蓋の口縁部で、端部は尖り気味に内傾しておさまる。残存部は内外面ともナデ調整である。174は杯の受け部で、口縁部は内傾して立ち上がる。受け部径15cmを測る。175は外反して立ち上がる壺の口縁部で、口径11.5cmを測る。

176-S P (176) 176は外反して開く土師器壺の口縁部で、口縁端部は丸くおさめる。

219-S K (178~180) 178は土師器の杯で、口縁部をヨコナデし、端部をわずかに尖らせておさめる。口径13.4cm。179、180は黒色土器B、179の口縁は段をつくり、端部は尖り気味におさめる。内外面を密なミガキで調整する。口径14.6cm。180は口径16.8cm、器高6.6cm、を測る。器壁の摩耗が進んでおり、調整は不明。

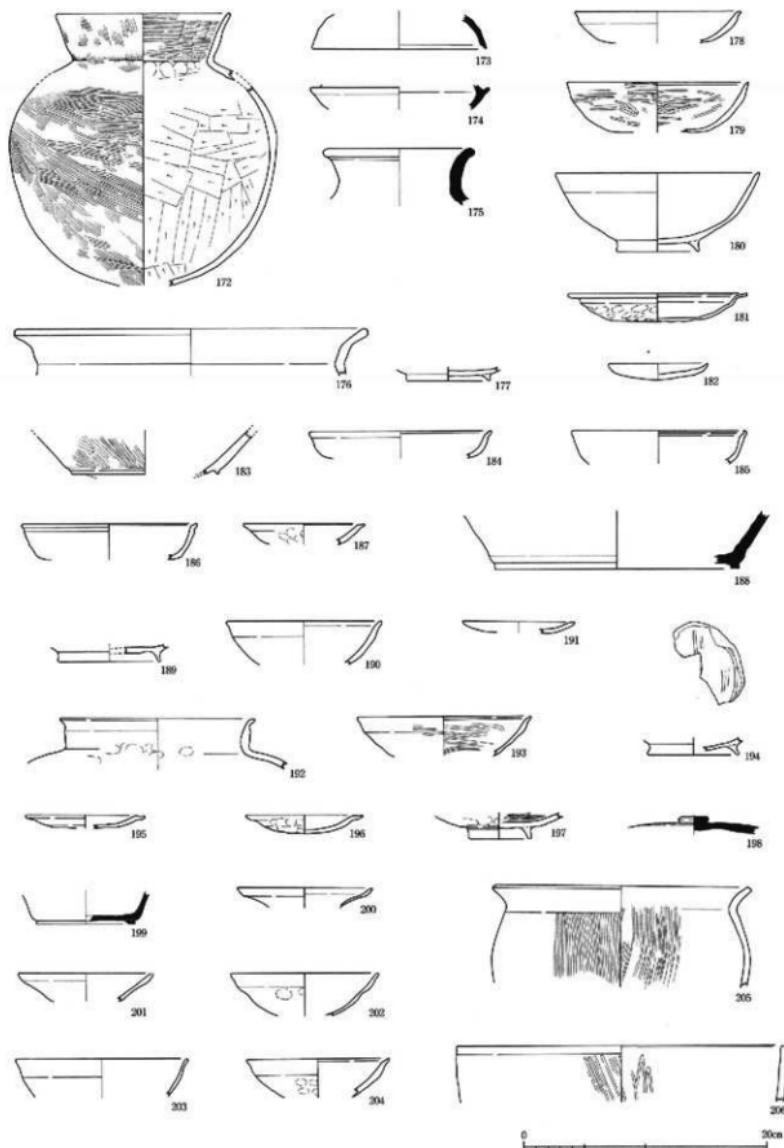
230-S K (177、181) 177は黒色土器の底部で内面に緻密なミガキが残る。高台径6.9cmを測る。180は口縁部が屈曲して開く「て」の字皿で、口径14.4cm、器高2.4cmを測る。

248-S E (183) 高杯の破片である。外面はヘラミガキ、内面の調整は摩耗している。

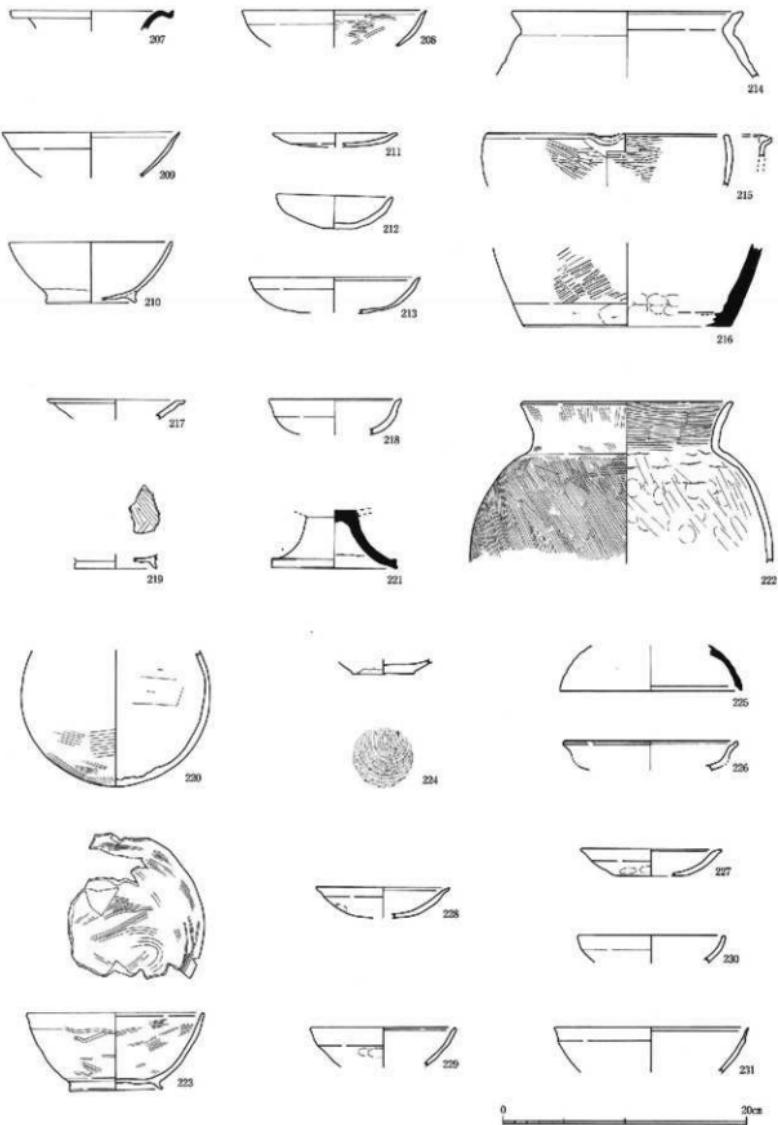
256-S K (182) 小皿で、口径8cm、器高1.4cmを測る。口縁部をヨコナデ調整する。

258-S P (184) 土師器皿の破片で、口縁端部を外反させ、ヨコナデ調整して丸くおさめている。復元口径14.4cm。

302-S P (185) 土師器杯で、開き気味に立ち上がる口縁端部を外反気味に丸く造るもの。摩耗が進み調整は不明である。口径14.2cmを測る。



第49図 各造構出土土器実測図-1



第50図 各遺構出土土器実測図－2

- 305—S P (186) 杯で、開き気味に立ち上がる口縁端部をわずかに外反させ丸くおさめる。口縁部外面を強くヨコナデ調整している。口径14.1cm。
- 327—S P (187) 開いて立ち上がる土師器椀の口縁部で、口縁端部は水平な面をつくる。
- 382—S K (188) 須恵器の底部破片で、平らな底部の隅に低い高台を貼り付ける。
- 351—S P (189) 土師器椀の高台部分の破片。高台径は8.3cm前後。
- 395—S P (190、191) 190は内弯して立ち上がる土師器の椀で、口径12.4cmを測る。191は小皿で口径は8.5cm。
- 401—S P (192~194) 192は土師器、球形の胴部から短く立ち上がる頸部に、外反する口縁部を付ける。口縁端部を強くヨコナデし、水平な面をつくる。肩部に指頭痕が残る。口径15.8cm。193は黒色土器椀で、口縁端部を尖り気味におさめる。見込みは密なヘラミガキで調整する。194は黒色土器椀で、「ハ」の字形に踏ん張る高台部分の破片である。
- 404—S P (195~197) 195、196は土師器の「て」の字皿である。196は外面にユビオサエの痕が残る。口径8.6cm。197は黒色土器椀の高台である。
- 421—S K (198) 須恵器、蓋杯のつまみ。
- 427—S P (199) 須恵器杯で、平らな底部の隅に低い高台を貼り付ける。高台径8.1cm。
- 439—S P (205) 205は甕で、わずかに膨らむ胴部から外反する口縁部をつくるもの。口縁端部は外傾する面を持つ。胴部は内外面とも縱方向のハケメで調整する。
- 448—S K (200) 屈曲気味に聞く土師器椀である。口径10.9cm。
- 451—S P (204) 黒色土器の椀で、外面にユビオサエが残る。口径11.4cm。
- 453—S P (201) 開いて立ち上がる土師器椀の口縁部。
- 454—S P (202) 黒色土器の椀で、器壁は摩耗している。口径12cm。
- 459—S P (203) 黒色土器の椀Aで外面はナデ調整である。口径14cm
- 478—S D (205) 黒色土器で、甌の口縁部である。内外面とも密なヘラミガキで調整する。
- 481—S D (207) 須恵器、壺の口縁破片で口径13.4cmを測る。
- 490—S K (208~216) 208は黒色土器椀。口径14.9cm、残存高3cmを測る浅い椀である。209、210は土師器の椀。210は高台まで残り、底部に高台の貼り付け跡をとどめる。口径13.3cm、器高5.0cm、高台径7.4cmを測る。211は小皿、212は丸底の杯で、口径9cm、器高2.8cmを測る。手握ね風の杯である。213は杯で口径13.8cmを測る。214は羽釜の口縁部破片で、口径18.8cmを測る。胎土は明るい灰白色である。215片口鉢の口縁部で、内外面を密にヘラミガキする。216は須恵器、平底の底部破片で、底径17cmを測る。
- 523—S D (217) 土師器で小椀か。口縁端部に水平な面をつくる。口径11cm。
- 524—S P (219) 土師器、椀の高台である。復元径6.7cmを測る。
- 554—S P (218) 土師器杯で、口径10.8cmを測る。
- 635—S E (221、222) 221は須恵器、高坏の脚部で、短くハの字形に外反し、却端部は上下

に僅かに拡張して、垂直の面をつくる。222は土師器の壺で、胴部下半を打ち欠いている。球形に近い胴部から外反気味に開口縁部をつける。胴部外面は細かいハケメ、内面はヘラケズリのち指押さえで調整する。口縁部内面はイタナデで調整する。

547-S P (220) 土師器、壺の球形を呈する胴部で、外面はハケメ、内面はヘラケズリで器壁を薄く仕上げている。底部の外面には煤、内面には炭化物が付着している。

632-S D (226) 土師器皿の小片である。開いて立ち上がる口縁を外反させ、端部を丸くつくる。

662-S P (223) 黒色土器の椀である。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。内外面のミガキはやや粗い。口径14.3cm、器高6.5cm。

664-S D (225) 須恵器の蓋で、口縁部は内傾する面をつくり、端部は鋭角的である。

682-S P (224) 緑釉陶器の底部で糸切り痕が残る。底径5cm。

741-S P (227) 平底の杯で、底部にユビオサエが残る。口縁端部はわずかに外反させ、尖り気味におさめる。口径11.4cm

751-S P (228、229) 228は杯で、口縁端部をわずかに外反させ、尖り気味におさめるもの。229は内弯して立ち上がる椀で、口径11.8cmを測る。

753-S P (231) 黒色土器椀で口縁部を強くヨコナデし尖り気味に仕上げている。

774-S P (230) 土師器椀の破片で。口縁部をヨコナデし、端部を丸くおさめている。

包含層出土土器（第51・52図）

須恵器（232～257、263、264）244～269、274、275

蓋（232～235）水平に近い天井部から屈曲して段をつける口頸部をもつもの。235は扁平な擬宝珠形のつまみが付く。236は杯身で外面に波状文を巡らせる。立ち上がりは受け部から連続し、口縁端部は丸く仕上げている。237、238の杯身は浅く、立ち上がりは短かく内傾し、端部を丸く仕上げている。239は丸底の底部から内弯して立ち上がる碗形のもの。240は平底の杯で口縁は直立気味に立ち上がり、端部を丸き仕上げる。241は低い高台がつくもの。

242～247は壺の口縁部である。242は平瓶か堤瓶の口縁部。243、259は短頸壺の口縁部。244～246は短く外反する口縁部で、246は頸部外面に自然釉が付着する。

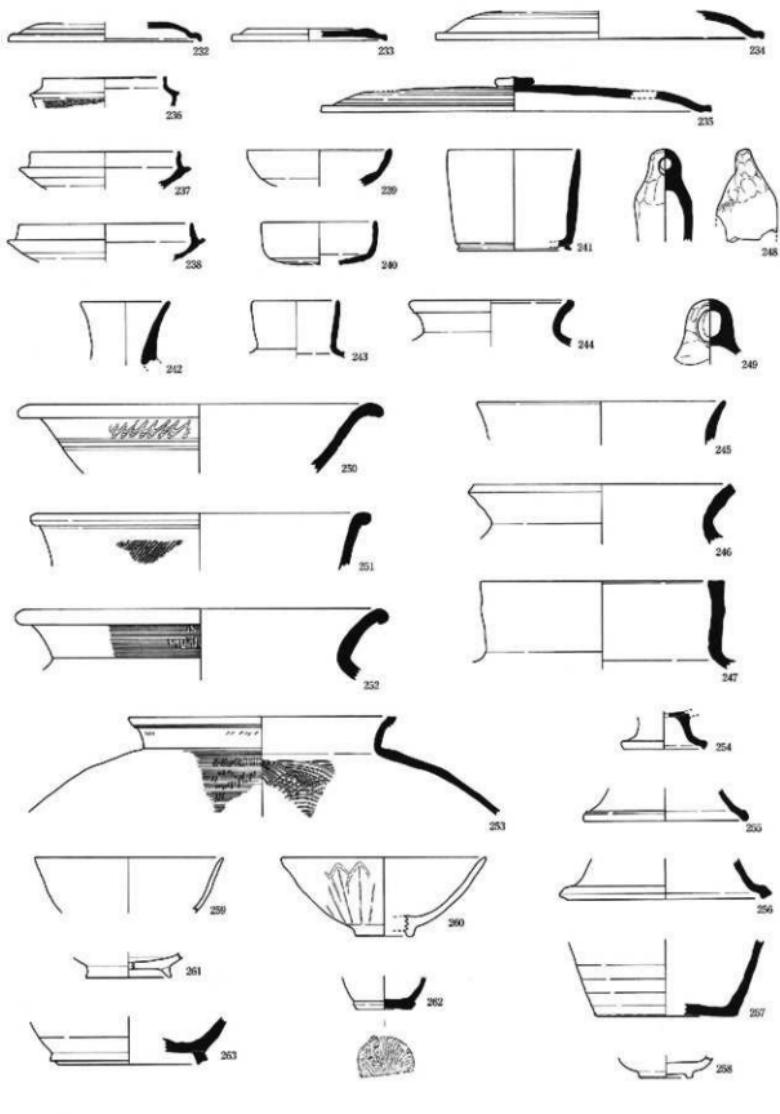
250は器台で外面に沈線と波状文を巡らせる。248、249は釣り鐘形のイイダコ壺。

251～253は壺の口頸部破片。254～256は脚部。256は脚部端が屈曲して広がる。262は小型壺の底部で、糸切り痕を残す。263は高台をつける壺の底部である。

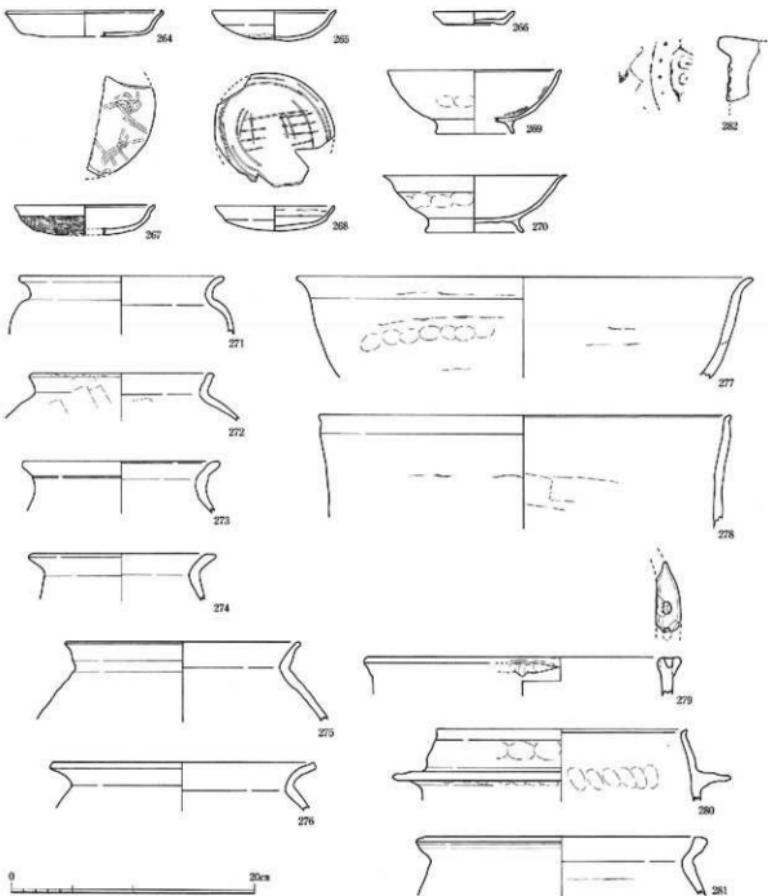
258～260は青磁碗の小片。258は小碗の高台、259の体部は無文、260は外面に蓮弁文を彫る。263は緑釉陶器の高台。

土師器

264、265は杯。266は小皿で、雨水ポンプ場調査区から出土。267、268は瓦器皿。268は見込みに格子形の暗文をつける。269は黒色土器椀。270は土師器椀で平安時代前期頃のもの。271～276



第51図 包含層出土土器実測図－1



第52図 包含層出土土器実測図一2

は壺や甕の口縁部。短く外反ぎみに立ち上がるもの（283、285、288）と開きぎみに立ち上がるものがある。275は頸部を強くヨコナデし、微かな段をつける。272は肩部から大きく脹らむ短頸壺。277は鉢、278は瓶。279は甕か鉢の口縁部破片で、水平な面を持つ口縁端部を刺突して把手をつくる。280、281は羽釜。280は水平に開く鉢から内傾ぎみに立ち上がる口縁部を持つもの。298は短く「く」字形に開く口縁部を持つものである。

294は複弁の蓮華文軒丸瓦の破片である。調査地北側に觀音や薬師等の小字があり、過去の調査で瓦が大量に出土している。今回の調査地では瓦類は小破片のみが出土した。

5. 砂ろ過連絡管渠調査区

今池処理場の南西端の調査区である。大きさは南北23m、東西80m、面積約1900m²であった。

基本層序

この調査地はT.P.12m近くまで高く盛土されていたので南調査区と同じようにT.P.10.00mまで調査前に掘削した。その後、溜池を埋め立てた土砂や堤体斜面に厚く堆積したヘドロをバックホウで除去し、堤体築成土や堤体斜面に堆積した土層を観察した。掲載したのは調査区の西側、Y = -43.580ラインの南北断面である。堤体築成土の主要部分は調査地の南側にあり、堤体から池底部にあたっていた。

②層より上に堆積しているのはブロック土で、堤体の土が崩れたり、堤の浚渫・修築時に投入された土と考えられる。灰白色粘土や、灰褐色粘土、黄橙色粘土、緑灰色粘土などが木片や腐植物、炭化物を交えた10~20cm程度のブロックで複雑に混ざり合っている。

③層は明緑灰色シルト層で、滞水時に薄く堆積したもの。④層は同色の粘土に③層のシルトが混ざった層である。⑤層は地山の粘土層で、マンガンが沈着している。

地山面は北になだらかに傾斜しており、東西に走る段差を2箇所確認した。南側は比高差5cm前後、北側は約10cmを測る。

遺構

裾部で2条の溝、池底部で5箇所のビットを検出した。

溝は2箇所の段差の延長線上にあり、段差を造る際の目印に掘られたものかもしれない。

1001-S D

東西に延びる上段の段差に沿って掘られた小溝である。幅0.15~0.25m、深さ0.5~0.1m前後を測る。埋土は灰白色砂であった。

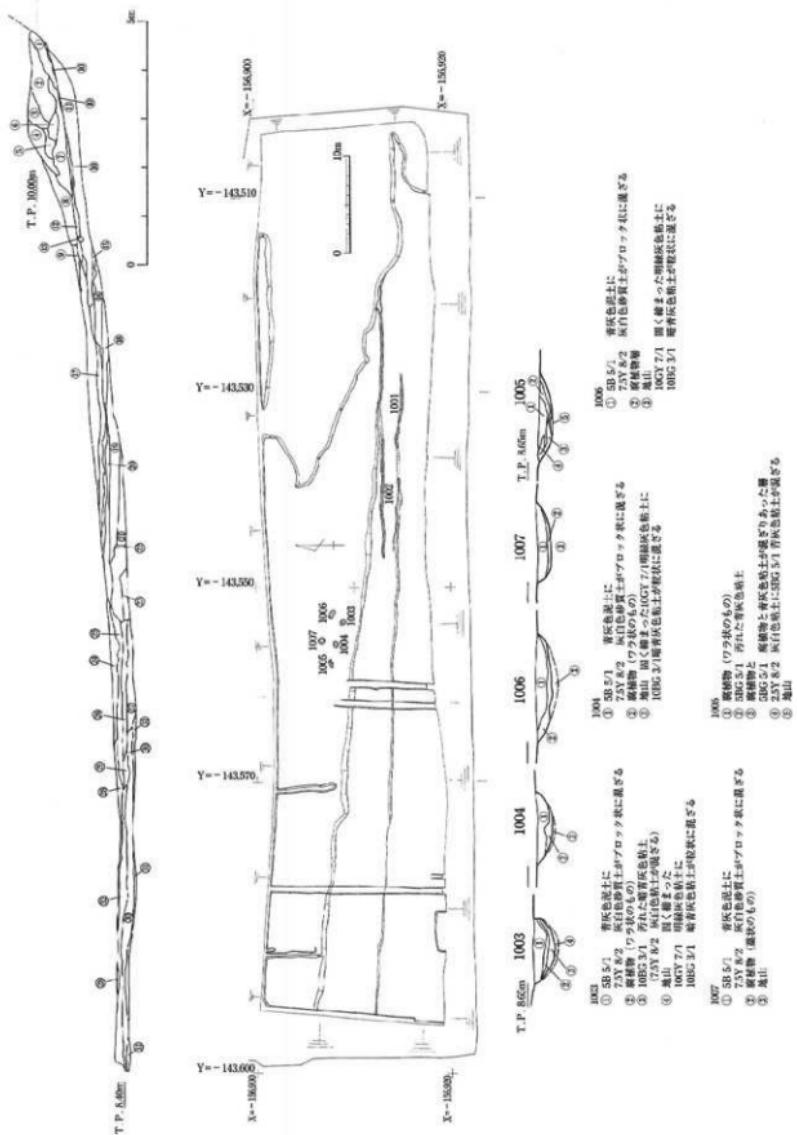
1002-S D

下段の段差に沿って掘られた溝である。東側では段差が小さくなり、この溝に吸収されている。段差の成形後にこの溝が掘られたのであろう。埋土は灰白色砂であった。

ビット

池底面ではほぼ下段に並ぶ方向で掘られたビットを5個検出した。

ビットは歪な円形または楕円形で、堀方は1003-S Pが鑄り鉢型、1004~1007は皿状の断面形を示す。埋土は1003~1006-S Pが①青灰色泥土に灰白色砂質土がブロック状に混ざった土。②葉状の腐植物層の2層、1007-S Pは①腐植物層が上面に敷き詰められ、その下は青灰色粘土と腐植物が混ざった層であった。池底に掘られたビットで用途や腐植物を敷き詰めた目的は不明である。



第53図 砂ろ過連絡管渠調査区平面図、ピット断面図

第3節 まとめ

水処理施設南調査区

南調査区、南その2調査区では、今池築造以前の溝を3条とピット、土坑、近世頃の井戸を検出した。この調査区は下水処理場建設前の擾乱が大きかったが、遺構の検出状況や、南の電気室（「大和川今池遺跡発掘調査概要V」のB地区）の調査でも検出された遺構は少ない。北調査区の調査でも明らかなように、当遺跡では居住域は水捌けがよい砂礫質土上に集中し、水捌けが悪い粘土質を避ける傾向が顕著である。溝以外の遺構は他に繋がりが見えず、性格を推し量ることはできない。

3基の井戸から遺物は出土しなかったが、堤体との関係から近世以降のものである。埋土から長期間使用されたとは考えられず、旱魃などの際に穿鑿されたものと考えられる。

今池の堤体については、ハガネ土が現堤体の4、5m東側から浅く掘られており、今池は何らかの理由により、西に縮小されたことが明らかとなった。本池の縮小と東北側の副池の築造の経緯を記す記録を探すことはできなかったが、大和川開削による、西除川の付け替えはこの地域の水利に大きな影響を与えたことは想像に難くない。今池築造前後を含めこの地域の水利を改めて辿ることが必要であろうか。

水処理施設北調査区

この調査区では北西部を中心に、古墳時代から平安時代の遺構を多数検出した。188-S Dより南側は上部を削平されている可能性を捨てきれないが、柱穴を検出できなかつたので、平安時代までの集落は砂礫を含む水捌けの良い場所を選んで立地していたといえる。当遺跡内で遺構の密度に偏りがあるのは生活面の土質に規制されたためであろう。

掘立柱建物は10棟を復元したが、奈良、平安時代のものが多く、古墳時代と考えられるものは1棟だけであった。建物を図画する溝等の遺構は確認できなかつた。

井戸、土坑は湧水層に達しているものと、1m前後の深さで止まるものがある。埋土の状態から浅い井戸でも明らかに貯水機能を有していたものが多数確認される。このような井戸は古墳時代から平安時代のいずれの時期にも存在しているようである。水を溜めて堅果類や胡桃等のあく抜き等に使用されたものであろうか。

堤体のハガネ土は3カ所で構造を確認した。詳細は省略するが、堤体にかかる水压を考慮した上でハガネ土の掘削規模を決定していたことが明らかとなつた。

本遺跡は旧石器時代からの遺物が出土するが、居住痕跡が明確となるのは古墳時代以降である。特に古墳時代後期にはこの地域でも屈指の規模を持つ集落が広がっていた。依網池開発による依網屯倉の経営との関係などこの地域の歴史をより豊かなものにするために解明すべき問題は山積している。今後の調査を待ちたい。

北調査区包含層出土瑞花鳳凰八稜鏡について

西川 寿勝

北調査区の包含層から瑞花双鳥八稜鏡が発見された。残念ながら古墳時代から中世頃までの土器とともに出土しており、鏡の時期やどのような目的でこの地にもたらされたのか特定できない。しかし、この鏡式は唐風の紋様構成と日本風の紋様構成が混在する過渡的鏡式で、日本独自に發展していく「和鏡」成立過程を示す注目すべき資料として知られる。

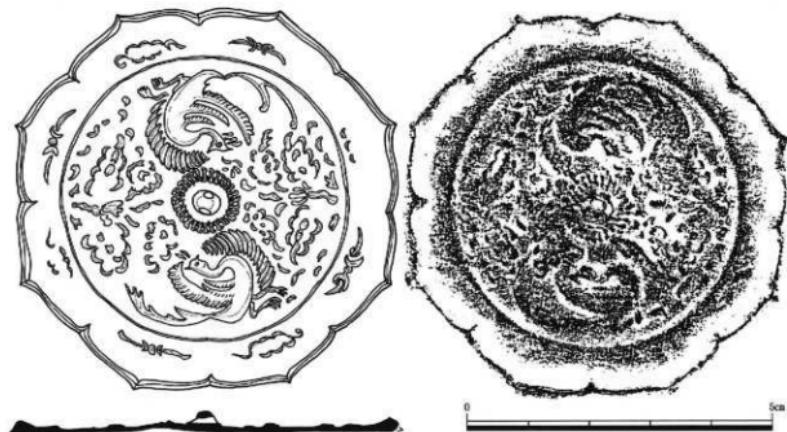
この鏡は最大径8.8cm、外縁がわずかにせりあがり、断面形が三角となる八稜鏡である。現状は66gである。中心は緩やかに捩る緻密な花心紋の鉢と鉢座がある。鉢の高さは約0.3cm、いびつで華奢な半円形で、中国鏡とは峻別できる。また、後の時代に踏み返された高麗鏡などの鉢形態とも違い、わが国で作られた鏡であることがうかがえる。

内区主紋様は鉢を中心に二羽の鳳凰が相対して刻まれ、その左右には瑞花と呼ばれる唐草化した花紋がある。相対する瑞花と鳳凰はほぼ同じ構図である。鳳凰は尾羽を長く描き、冠羽もみられる古式の形状だが、体躯は厚く鶯鶯に近い。瑞花は左右に草葉を開き、中心に蕾状の瑞花を伴う。

内区の外側はわずかに高くなり、外区となる。両区を区切る圓線や段は明瞭でない。八稜の隙間に紋様を刻むものの、珠紋化する。唐草紋が形骸化したものだろう。八稜の先端は丸く潰れ、外形の凹凸はゆるい。

発見当初の鏡は表面に銘が進行し、暗黄褐色の鏡胎に群青色の柔らかい銘がほぼ全面を覆う様相だった。これは鏡胎の銅成分が土中に溶け出して酸化、表面のみに青い銘がこびりついた状況である。出土した古鏡の金味に目立つ現象である。しかし、紋様の不鮮明さは銘や出土状況が原因ではなく、もともとの銘上がりの悪さ、粗略さに由来すると考える。特に、外縁端部の断面形は鋭角的な台形とならず、薄く丸みを帯びて不定形な三角形である。この鏡式中では華奢な鉢、薄い外区とあわせ、末期的様相を示す。鋳型に直接へら押しして作られたものではなく、粗略な踏み返しによって銘上がりが悪くなったことが原因であろう。主紋様が古式であるにもかかわらず、構成が末期的様相であることとも符合する。ただし、栃木県男体山山頂遺跡発見の八稜鏡では三組六面に同范鏡が確認されたという報告もあり、同范か踏み返しかによる技法研究の進展が期待される。今のところ、銘上がりの甘さや鉢形状などから、本鏡は10世紀に遡る古式の鏡を原形に、踏み返し鋳造したものと考える。この鏡の鋳造時期は瑞花双鳥八稜鏡中では末期的様相を示し、11世紀以降だろう。

さて、古式の瑞花双鳥八稜鏡には鏡面に針書きで鏡像を描き、「永延二年」(988年)銘のある



第54図 出土瑞花鳳凰八稜鏡拓本（右）・復原図（左）

もの、「永延三年」(989年)針書き銘のもの、「寛弘四年」(1007年)針書き銘のものが知られる。以上よりこの鏡式の成立時期を10世紀後半～末に位置付けることができる。さらに、以上の紀年資料より古式の図像とされる飛翔するカササギを描く鏡が三重県蓮台寺跡出土鏡、栃木県男体山頂遺跡出土鏡などにみられ、中国鏡から脱却して成立する時期は10世紀前半という説もある。

菅原道真の建議によって9世紀末(894年)に遣唐使が廃され、飛鳥・奈良時代のような中国文化の影響が途絶える。鏡に限らず、各種の器物にはわが国独特の要素が目立つかのようである。一見、これらは「和様」の成立と捉えられがちであるが、唐様式が衰退し、次代の五代・宋の様式への変化に連動していることを見抜く考え方もある。本鏡式においても、蝶原型による重厚で肉厚な唐鏡にかわり、華奢な鉢・外縁形態の五代・宋鏡が影響したものと受けとめることができる。10世紀に本鏡式成立の一端を見ることが出来るが、この時期は本鏡式以外に鏡が作られることはなかった。系譜はほぼひとつ限りで、京都の工房と思われる。したがって、鏡の需要と生産量は少なかったと考える。

ところが、11世紀代は全国的に出土鏡数が増加し、生産量の画期を読み取ることができる。それは富裕層の増加や化粧道具の普及が原因ともされるが、実用品の需要増にとどまらない。発見鏡は末法思想に伴う経塚への埋納や、密教信仰に伴う奉納など、非実用的な用途が一般化していくことに起因する出土を示す。その意味において、本鏡は銅質や鑄上がりが悪く、実用に適さない。集落から離れ遺構に伴わないところから発見された理由をも示唆すると考える。

最後に、府内出土八稜鏡について分析する（表参照）。管見の限り、全国で知られる八稜鏡は

350面以上、近畿では50遺跡以上の発見例がある。出土遺構は墳墓・祭祀跡・経塚など様々である。特に、奈良県金峯山山頂遺跡からは118面以上の鏡が発見され、八稜鏡は少なくとも44面で確定しない。概して、東日本では住居跡や祭祀遺跡出土例が多く、西日本では墳墓や経塚出土が多い。栃木県男体山山頂遺跡には160面以上の鏡が奉納されそのうち115面が八稜鏡で圧巻である。府内でも墳墓と経塚への埋納が目立ち、包含層出土鏡の本来の性格を示唆するものである。

表2 府内出土八稜鏡

No.	出土地	出土遺跡・造構	出最大径(cm)	備 考
1	箕面市箕面公園北方	箕面経塚	10.8	他に鏡、白磁合子等
2	高槻市宮田	宮田遺跡包含層	9.5 破片	
3	枚方市牧野本町	九頭神遺跡(第53次)・土壙墓2(SK-2)	12.1	土壙墓1から青磁碗
4	東大阪市上四条町寺山	神感寺・採集	8.6	神感寺は山岳寺院
5	大阪市	大坂魚市場跡		歪みあり
6	大阪市平野区長寺長原	長原遺跡・自然流路層	8.5 欠損	火傷あり
7	堺市翁橋2丁目	翁橋遺跡・大溝	7.4	古墳・奈良期の祭祀跡
8	高石市綾園	大園遺跡・大溝	10.2	8・9は共伴。坪境の溝か。
9	高石市綾園	大園遺跡・大溝	9.6	歪みあり。
10	和泉市池上町	池上曾根遺跡・K地区包含層	不明、破片	中世寺院か。瓦多数。
11	和泉市梅尾山施福寺	和泉梅尾山経塚・B地点	7.5	永正11年(1514)銘 経筒、他に一面。
12	柏原市玉手町	玉手山遺跡89-1区・火葬墓	10	
13	松原市大見西3・6	大和川今池遺跡北区・包含層	9.3	
14	藤井寺市小室	小室山古墳・土壙墓(栗塚東)	9.4	
15	美原町貞福寺	真福寺遺跡・梵鐘鋸造造構1号 上壇	30.0	鋸型片
16	美原町丹上	丹上遺跡・包含層	9.7	掘立柱建物群
17	千早赤阪村二河原辺	誕生地遺跡・地山直上層	不明、破片	五稜鏡片

1. 西川寿勝
 2. 高槻市教育委員会
 3. 西田敏秀
 4. 東大阪市教育委員会
 5. 大阪市文化財協会
 6. 大阪市文化財協会
 7. 堺市教育委員会
 8. 大阪市立博物館
 9. 同上
 10. 第二阪和国道内遺跡調査会
 11. 和泉市久保惣記念美術館
 12. 柏原市教育委員会
 13. 本書
 14. 東京国立博物館
 15. 大阪府文化財調査研究センター
 16. 読売新聞社
 17. 文献なし 著者実見
- 2003 「平安時代のタイムカプセル」『大阪春秋』111 大阪春秋社
1978 「高槻市埋蔵文化財年報』51・52年度
1992 「九頭神遺跡（第53次調査）出土の八伎鏡について」
「枚方市文化財研究調査会研究紀要』第2集
1964 「河州神感寺跡の調査』
1987 「大坂魚市場跡』
2000 「長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 XV
1984 「堺市埋蔵文化財報告』 18
1985 「日本の古鏡』
1970 「池上・四ツ池遺跡』
1983 「和泉市横尾山経塚』
1990 「柏原市埋蔵文化財調査概報1989年度』
1969 「東京国立博物館館藏品目録』
1997 「真福寺遺跡』
1990 「読売新聞』河内版 3月1日朝刊

表3 北調查区遺構・地区对照表一

遺構番号	地区	遺構番号	地区	遺構番号	地区	遺構番号	地区	遺構番号	地区	遺構番号	地区
051	i3	106	d2	168	e4	229	c5	283	d5	345	e4
052	h3	107	d2	171	e4	230	c5	283	g5	346	e4
053	j3	108	d2	175	e3	231	c5	284	d5	347	e3
054	g5	109	d2	176	e4	233	c5	285	d5	350	e4
055	e4	113	c2	177	e4	234	c5	286	d5	351	e4
056	d2	114	c2	178	e4	236	c5	287	d5	352	e4
057	d2	115	c2	179	e4	237	c5	288	d5	353	e4
058	d2	116	c2	180	e3	238	c5	290	d5	354	e3
059	d2	118	c2	181	d4	239	c5	292	d5	355	d4
060	d2	119	c2	182	e3	240	c5	294	d5	355	e3
061	d2	120	c2	183	f4	241	c5	295	d5	356	f4
062	d2	121	c2	184	e4	242	c6	296	d5	358	e4
063	d2	122	c2	185	f4	242	c4	297	d5	359	f4
064	d2	124	c2	186	f4	243	c5	298	d5	360	f4
065	d2	125	c2	187	e4	245	c5	299	d5	362	e4
066	d2	126	c2	188	e4	246	c5	300	d5	363	e4
067	d2	131	c3	190	e4	247	c5	305	d5	364	e4
068	d2	132	c3	192	e4	248	d5	306	d5	365	e4
071	ef2	133	c3	193	e4	249	c5	309	d5	366	e4
072	e2	134	b3	194	e4	251	c5	310	d4	367	e4
073	e2	135	b3	195	e4	252	c5	311	d4	368	e4
074	e2	136	c3	196	e4	253	c5	312	d4	370	e4
075	e2	138	c3	197	e4	254	c5	313	d4	371	e4
076	e2	139	c3	198	e4	255	c5	314	d4	372	e4
077	e2	140	c3	199	e4	256	c5	315	d4	373	e4
078	e2	141	c3	200	e4	257	d5	316	d4	374	e4
079	e2	142	c3	201	e4	258	d5	318	d4	375	e4
080	e2	143	c3	202	e4	259	d5	319	d4	376	e4
081	e2	144	c3	203	e4	260	d5	320	d4	377	e4
082	d2	145	c3	204	e5	261	d5	321	d4	378	e5
083	e2	146	c3	205	e4	262	d5	322	d4	379	e4
084	e2	147	c3	207	e4	263	d5	323	d4	380	e4
085	e2	148	c3	208	e4	264	d5	324	d4	381	e4
086	e2	149	c3	210	e4	265	c6	325	d4	382	e4
087	d2	150	g3	211	e4	266	d5	326	d4	383	e4
088	d2	151	c3	212	e4	267	d5	327	d4	384	e4
090	d2	152	c3	213	e4	268	d5	328	d4	385	e4
091	d2	153	c3	214	e5	269	d5	330	d4	386	e5
092	d2	154	c3	215	e5	270	d5	331	d4	387	e5
093	d2	155	c3	216	e5	271	d5	332	d4	388	e5
094	d2	156	c3	219	e5	272	d5	333	d4	389	e5
095	d2	157	d3	220	e5	273	d5	334	d4	390	e5
096	d2	158	d3	221	e5	274	d4	336	d4	391	e5
097	d2	160	d3	222	e4	275	d5	337	d4	392	e4
098	d2	161	d3	223	e4	276	d5	339	e4	393	e4
101	d2	162	d3	223	e4	277	d5	340	e4	394	e4
102	d2	163	d3	224	e4	278	d5	341	e4	395	e4
103	d2	164	d3	226	e4	280	d5	342	e4	396	e4
104	d2	166	d3	227	e4	281	d5	343	e4	397	e4
105	d2	167	d3	228	e4	282	d5	344	e4	398	e4

表2 府内出土八穀鏡一2

遺構番号	地区	遺構番号	地区	遺構番号	地区	遺構番号	地区	遺構番号	地区	遺構番号	地区	遺構番号	地区
455	f5	511	f4	573	d5	623	e5	678	f5	735	h4	790	f6
456	f5	512	f4	574	d5	624	e5	679	f5	737	f5	791	f6
457	f5	513	f4	575	d5	625	e5	680	f5	738	f5	792	f6
458	f5	514	f4	576	e5	626	e5	681	f5	739	f5	793	f5
459	f5	515	f4	577	e5	627	e4	682	f5	740	e5	794	f6
460	f5	516	f4	578	e5	628	e4	683	f5	741	e5	795	f6
462	f5	517	f4	579	e5	629	e4	684	f5	742	e4	796	f6
463	f5	518	f4	580	e5	630	f4	685	d5	743	e5	797	g6
464	f5	519	f4	581	e5	631	f4	686	f5	744	f4	798	g6
465	f5	520	f4	582	e5	632	f4	687	f5	745	g4	799	g6
466	f5	521	f3	583	e5	633	c5	689	c5	746	g4	800	g6
468	f5	522	f3	584	e5	635	d4	690	e5	748	f4	801	d6
469	f5	523	g4	585	d5	638	d6	691	b6	749	f4	802	e6
470	f5	524	g4	586	e5	639	d6	692	c5	751	g5	810	i5
471	f5	526	c5	587	d5	641	d6	693	c4	753	f5	811	i4
472	f5	527	d5	588	e5	643	d6	694	c4	754	c6		
473	f5	528	d5	589	e5	644	e6	695	d4	755	d6		
473	f5	529	c5	590	e5	645	e6	696	c4	756	d6		
474	f5	530	c4	591	e5	646	e6	697	d4	757	d6		
475	f5	531	c4	592	e5	647	e6	698	d4	758	d6		
476	f5	532	c4	593	e5	648	f6	699	d5	759	d6		
477	f5	533	c4	594	e4	649	f5	701	d3	760	d6		
478	f5	537	d5	595	e5	650	f6	702	c3	761	d6		
479	f5	538	c6	596	e5	651	f6	703	g3	762	d6		
480	f4	539	c6	597	e5	652	f5	704	f2	763	d6		
481	fg45	540	d5	598	e5	653	c6	705	h2	764	d6		
482	g5	541	d5	599	e5	654	f5	706	h345	766	d6		
482	g5	542	d5	600	e5	655	f5	707	h3	767	d6		
483	g5	543	d5	601	e5	656	f5	708	h3	768	d6		
485	g5	544	d5	602	e5	657	f5	709	h3	769	d6		
486	g5	545	d5	603	e5	658	f5	710	i2	770	d6		
486	g5	546	d5	604	e5	659	f5	711	i2	771	e6		
487	g5	547	d5	605	e4	660	f5	713	h2	772	e6		
488	g5	548	d5	606	e5	661	f5	714	i2	773	e6		
490	g5	549	d5	607	e5	662	f5	715	e4	774	e6		
492	f4	551	d5	608	e5	663	f5	716	d4	775	e6		
496	f4	552	d5	609	e5	664	f5	717	d4	776	e6		
497	f4	553	d5	610	e5	665	f5	718	d4	777	e6		
498	f4	554	d5	611	e5	666	f5	719	e4	778	e6		
499	f4	556	d5	612	e5	667	f5	720	e4	779	e6		
500	f4	557	d5	613	e5	668	f5	722	e5	780	e6		
501	f4	561	d5	614	e5	669	f5	723	d5	781	e6		
502	f4	562	d5	615	e5	670	f5	724	f5	782	e6		
503	j2	563	d5	616	e5	671	f5	725	f5	783	e6		
504	f4	564	d5	617	e5	672	f5	726	f5	785	e6		
505	f4	565	d5	618	e5	673	f5	727	f6	786	e6		
507	f4	566	d5	619	c5	674	f5	728	g6	787	d5		
508	f4	568	d5	620	e5	675	f5	732	e5	788	e5		
509	f4	569	d5	621	e5	676	f5	733	h4	788	e5		
510	f4	571	d5	622	e5	677	f5	734	h4	789	f6		

報 告 書 抄 錄

ふりがな	やまとがわいまいいけいせき							
書名	大和川今池遺跡							
副書名	今池処理場水処理施設等新增設工事に伴う発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2004-4							
編著者名	阿部幸一							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	面積 (m ²)	調査原因	
やまとがわいまいいけ 大和川今池 いやき 遺跡	まつしろし 松原市 あさみにし 天美西 ちのい 地内	27217	12	34° 35' 26"	135° 31' 26"	平成13年6月22日から 平成15年3月31日まで	7500m ²	今池処理 場施設増 設等
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
大和川今池 遺跡	集落跡	古墳時代 ? 平安時代	住居跡、井戸、溝、 土坑、溜池堤体		八稜鏡・須恵器・土師器・ 黒色土器・井戸枠木	古墳時代から平安時 代の掘立柱建物、井 戸、溝を検出。 溜池堤体を調査		

地 区 割 図

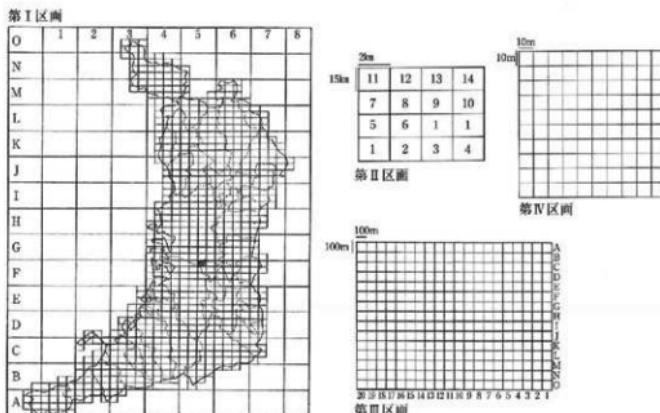
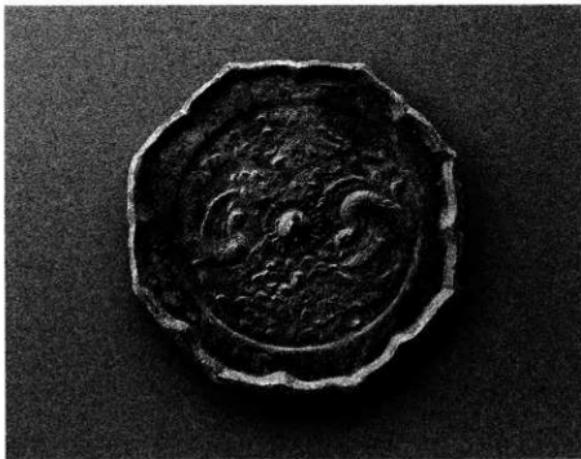
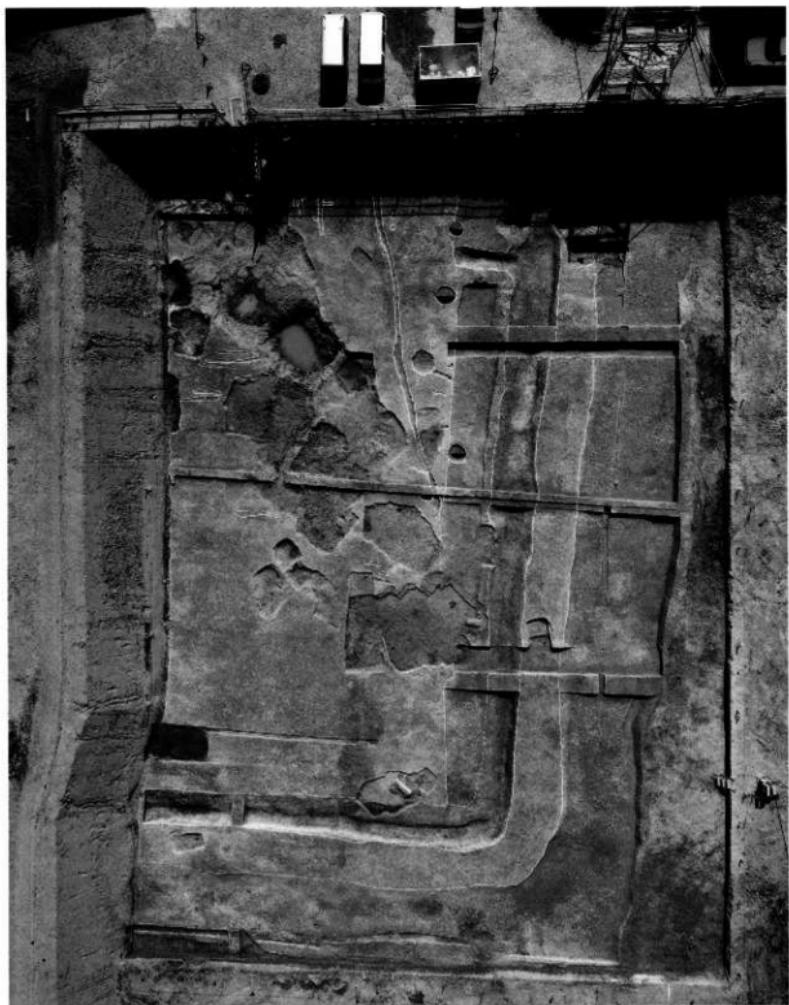


図 版



図版1 水処理施設南調査区航空写真



図版2 水処理施設北調査区航空写真



図版3 水処理施設南調査区全景



北から



西から

図版4 水処理施設南調査区全景



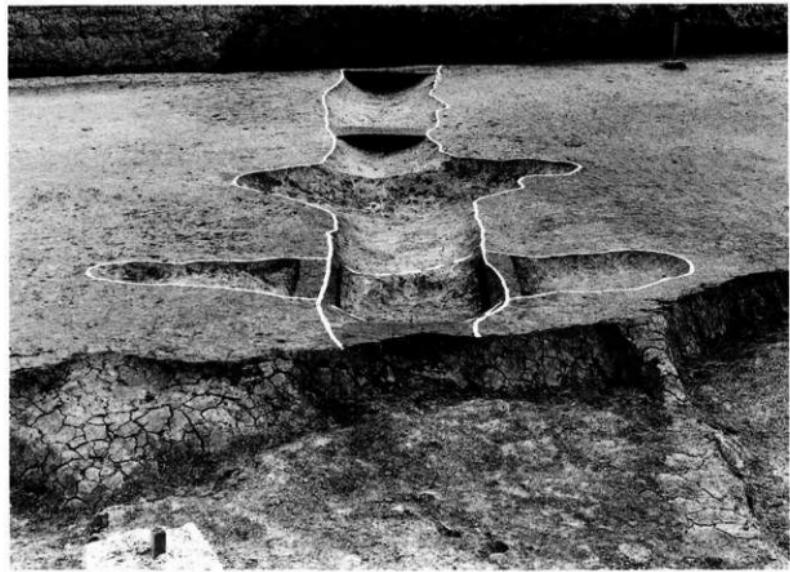
東から



西南から



全景（北から）



037-S D (西から)

図版 6
雨水ポンプ場調査区全景



南から



北から

図版 7 水処理施設北調査区微高地部

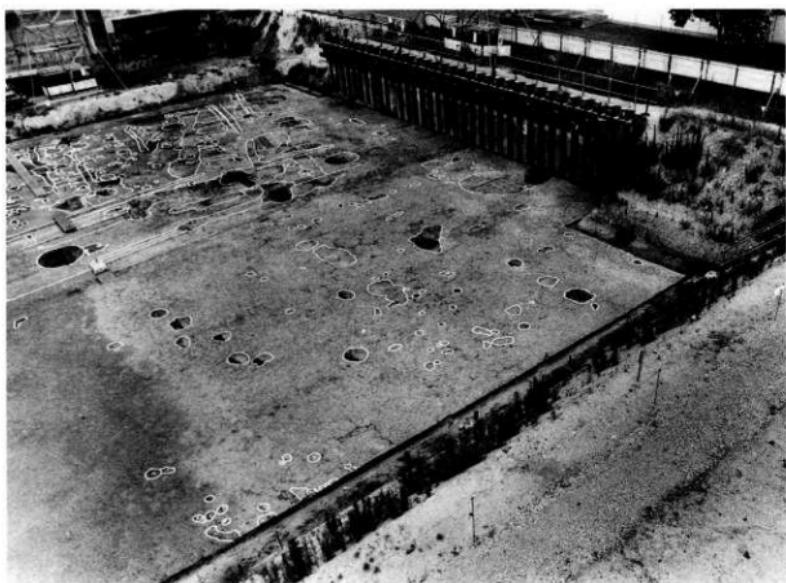


北から



南から

図版8 水処理施設北調査区



北部（東から）



東南から



全景（南から）



微高地部（西から）



掘立柱建物 1. 2. 10



446 - SK

圖版 11
水處理施設北調查區



北堤体下層



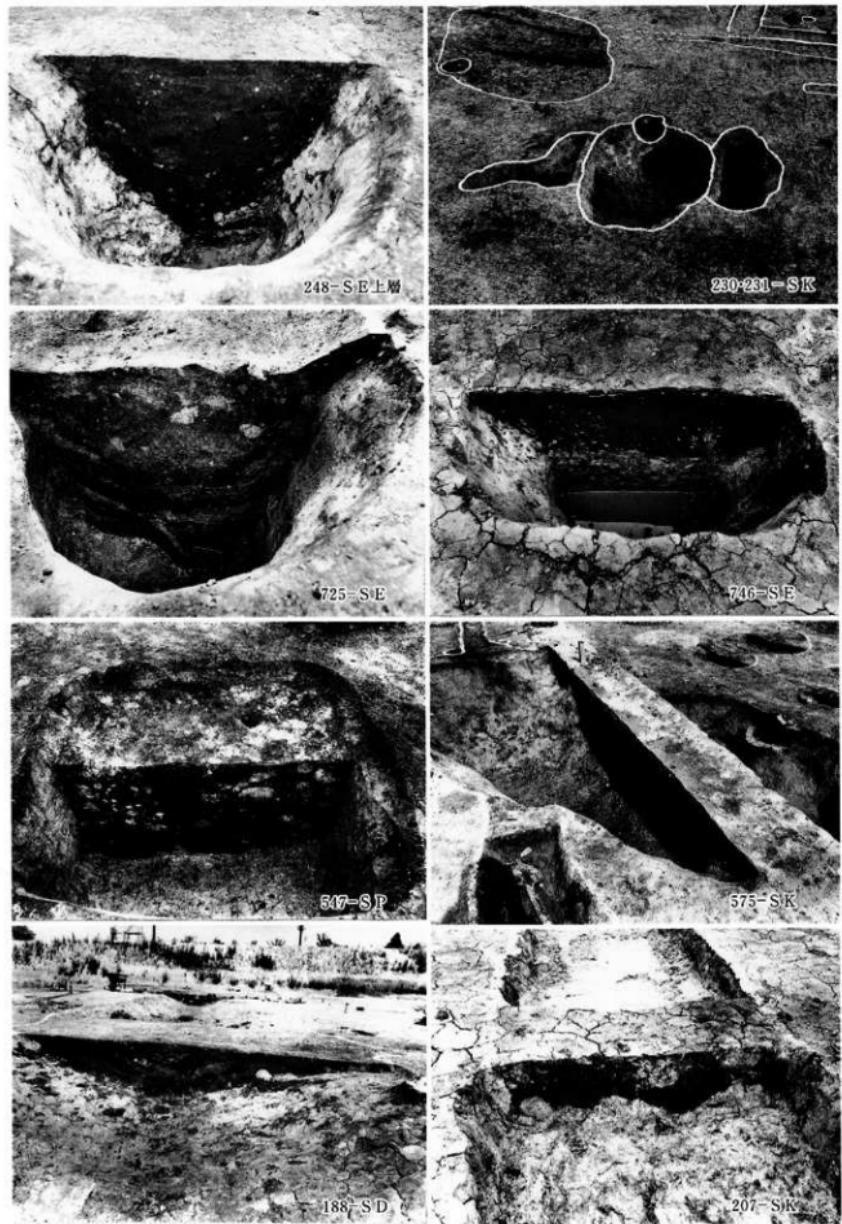
南堤体 002 - S D

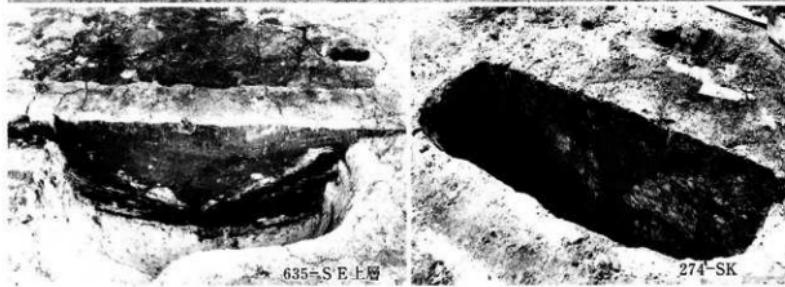
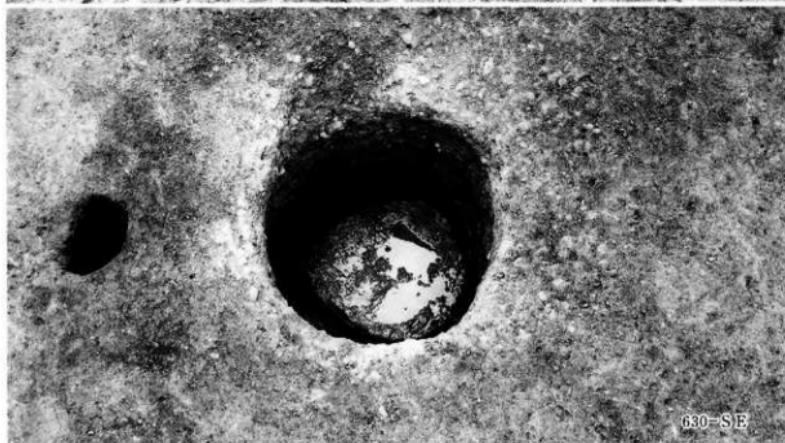


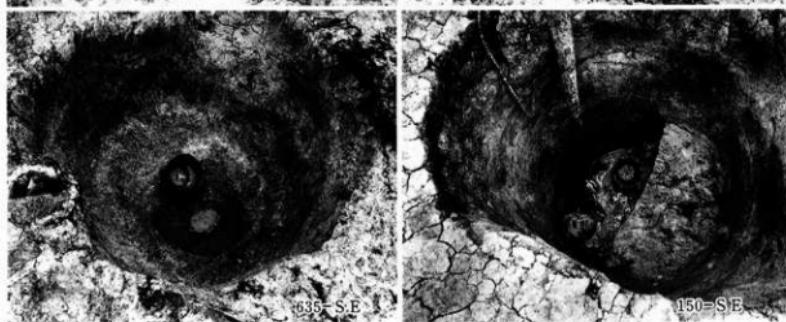
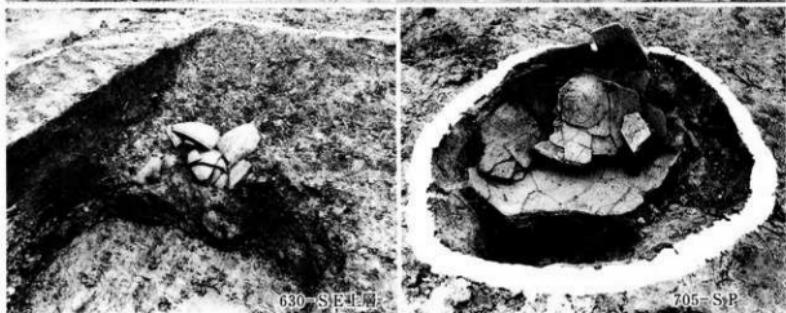
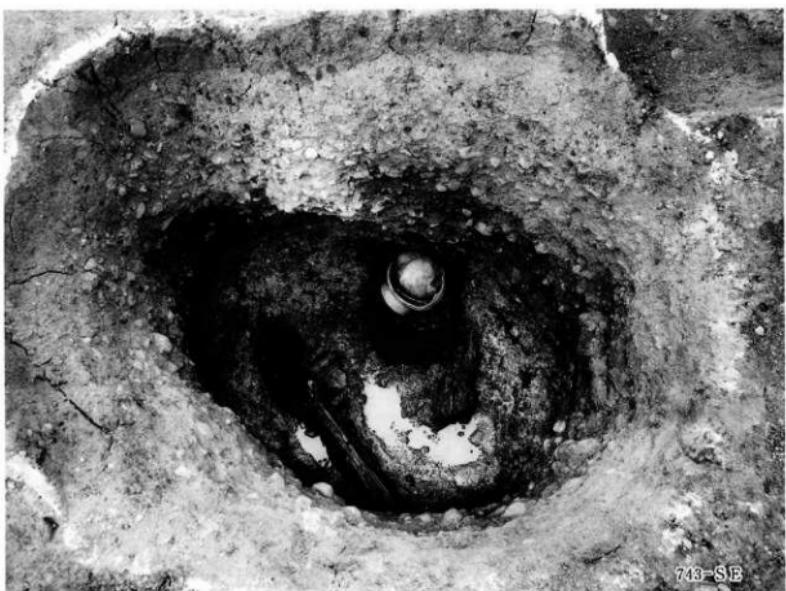
上層



井戸側 曲物出土時









今池南堤体検出時



断面

図版 17 砂濾過連絡管渠調査区全景



西から



73



71



78



75



77



80



79

156



110

100



125



64



149



91



140



48



165



242



222



270



103



223



104



70



61



56



57



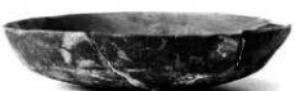
58



86



87



268



81



266



121



102

大阪府埋蔵文化財調査報告 2004-4

大和川今池遺跡

—今池処理場水処理施設等新増設工事に伴う発掘調査報告—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

Tel. 06-6941-0351

発行日 2005年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南2-6-8

Tel. 06-6976-8761

付図 大和川今池遺跡 水処理施設北調査区 遺構図

